



旧薬学専門部入口

旧薬学専門部校舎正門



被爆直後の薬学専門部教室



復興途上の長崎大学薬学部（昭和30年）

### 三、附屬薬専の部

#### 沿革

薬学部は昭和二十四年五月三十一日新制大学として長崎大学の一学部として発足したが、その前身たる長崎医科大学附屬薬学専門部の校歴をたずねると、実に明治二十三年六月十八日文部省告示第七号を以て第五高等学校医学部に附設された薬学科に始まり、明治二十七年九月勅令により第五高等学校医学部薬学科と改称、更に同三十四年三月三十一日長崎医学専門学校薬学科と改り、大正十二年三月三十一日勅令第九十三号を以て官立長崎医科大学の設置に伴い同大学附屬薬学専門部と校名を改称すること四たびにして昭和二十四年新制大学の薬学部となつたものである。

大正十二年四月一日附屬薬学専門部教授加藤静雄同専門部初代の主事に補せらる。同十四年四月加藤静雄の辞任に伴い、教授川上登喜二主事に補せらる。昭和二年十二月川上教授の辞任により教授高島清新たに主事に補せらる。同七年四月高島教授の辞任に伴い川上教授再度主事に補せらる。同十一年三月川上教授主事を被免、教授大倉東一主事に補せられる。昭和十四年三月大倉主事に替り教授植田高三その後任として之に補せらる。同十七年三月植田教授主事を免ぜられ、教授江口虎三郎主事に補せ

られ、同十九年四月一日主事江口虎三郎薬学専門部長となる。

昭和二十年八月九日原爆により全校舎倒壊炎上し職員学生四十有余名の尊い犠牲と共に一切を灰燼に帰した。昭和二十年十月佐賀市田布施町元青年学校跡に疎開授業を開始。同二十二年一月諫早市小野島町元航空機乗員養成所跡に移転。同年三月江口虎三郎部長病気のため教授一番ヶ瀬尙部長代理となる。同二十三年十一月川上登喜二文部教官に任ぜられ部長に補せらる。同二十四年五月三十一日長崎大学薬学部として発足。

同年同月川上登喜二初代学部長に補せらる。同年八月文部事務官平井吉次郎事務長を命ぜらる。

同二十五年五月長崎市片瀬町長崎大学経済学部の一部を借用し新制大学第一期生を收容し授業を行う。同年十二月下旬より長崎市昭和町の元長崎師範学校々舎を使用することとなり、同本館東側（二八七坪）の補修工事に着手。同二十六年二月末第一期工事の完了に伴い、諫早市より移転し、同年三月旧薬学専門部最後の卒業式を同校舎にて挙行し、四月片瀬町経済学部よりの移転も完了。

昭和二十六年十二月本館西側片袖（三二九坪）を第二期工事として着工、翌二十七年三月工事完了。同年七月川上登喜二退任に伴い教授高取治輔部長事務取扱を命ぜらる。同年七月本館正面玄関から西側（二五五

坪)を第三期工事として着工。同年九月教授高取治輔事務取扱を免ぜられ学部長に補せらる。同月ガス引込工事(住吉より一、二〇〇米)に着手完了す。同年十月第三期工事完工す。

昭和二十九年九月教授高取治輔学部長の併任終了し教授梁井光二学部長に併任せらる。文部事務官平井吉次郎転出により文部事務官西山淳次事務長を命ぜらる。同年十月本館正面玄関より東側(二七〇坪)の第四期工事に着手翌三十年三月第四期工事完了。

### 当時の概況

当時、薬学専門部は江口虎三郎部長の下に、清木美徳、田中欽二、若林善兵衛、横山復次、山下次郎、杉浦孝、一番ヶ瀬尙の各教授、河野喜美彦、秋山恒雄の両助教授、大島亀治講師が在籍し、このうち若林教授、大島講師は休職中、河野助教授は応召中であつた。

この他講師として医大、高商から数名の先生が招かれていた。

在席生徒数は二百一名で、七月に入學した一年生九十二名は市内鮑の浦の三菱電機製作所に動員し、二年生六十名も熊本県葦北郡水俣の日窒工場に動員中であつた。

三年生四十九名は九月卒業のため、動員先の福岡県築上郡吉富町の武田製薬吉富工場、山口県小野田市の田辺製薬小野田工場から七月末に帰校し卒業までの日々を学業に専心していた。

事務関係では河野通雄氏、松尾滝子、内野輝子、井手篤子、酒井美智

子、真崎久子、野中京子の諸氏、小使の岩本偵吉、山本利吉、横瀬久吉の各氏が在籍、勤務していた。

### 被爆時の状況

当日、江口部長、田中教授、横山教授、一番ヶ瀬教授、秋山助教授は出張中で難を免る。在校の清木教授は防空壕掘り作業の指導中壕内で被爆負傷し、杉浦教授は薬草園で被爆即死。山下教授は大学病院に入院中被爆し死亡す。

在校中の三年生は防空壕補強工事中で二十三名が死亡。又健康上動員に耐えぬことで学校に残っていた二年生九名は図書整理中被爆死亡す。一年生四名も被爆死亡す。

事務の河野氏は当日休暇をとつていて被爆を免る。松尾滝子氏は自宅で爆死。内野、井手、の両氏は校内で被爆し死亡す。酒井、真崎、野中の三氏は在校中であつたが詳細は不明である。又小使の岩本、山本、横瀬の各氏も校内で被爆死亡する。

斯くて教授二名、生徒三十六名、事務関係者六名、計四十四名の犠牲者を出すと共に校舎、図書、器材はすべて灰尽に歸したのである。

## ▽原爆前後△

### 原爆までの記

秋 山 恒 雄

八月九日、唯一人として夢想だにしなかった、運命の日、あれから早や十年の才月が流れましたが、幸にも手もとに当時の簡単なメモがありましたので、薬学専門部の記録を辿ってみようと思います。

昭和二十年三月二十四日、午後一時より一年生の及落判定会あり。原級者四名決定す。五時半頃、東京乙卯研究所に戦時研究員として、上京中の田中欽二教授、突然の来校を見、東京の空襲、食糧事情などの状況を聞く。(尙田中教授は九月三日、終戦直後の混乱の東京にて急死、此日が先生最後の登校日となる。)

三月二十七日、一年生五十名、大橋電車停当所に九時集合す。浦上上水道を見学、杉浦、副島の両兄も同行し、緩速濾過法による上水道を見る。十一時警報発令、見学を中止して、大学に生徒等と共に急行帰学。途中敵機の来襲に逢う。

四月十日、九時より二年生教室にて副島助教授の在校生へ退任の挨拶あり。同助教授は広島文理大化学科へ入学、江口部長佐賀帰省中不在の為、清木教授の紹介にて行わる。三年生は工場動員中の為不在、二年生五十余名出席、淋しい生徒への別れの挨拶となる。

五月九日、午後より教官会議あり、軍の要請による国内医薬資源確保の為の研究要員、囑託の件に付種々協議す。

(尙八月八日本件に付西部軍の指令により福岡市にて最初の協議会あり。之に出席の為、江口部長、一番ヶ瀬教授等は九日は学校に不在、

原爆の災害を免れらる。)

五月二十五日、杉浦教授、田辺製薬小野田工場に動員中の三年生々徒を監督の為本日、小野田市へ出張す。又半数の生徒は武田薬工の吉富工場に動員中。

六月七日、小生杉浦教授と交代の為、九時半、長崎駅発の列車にて小野田に向う。駅にて同期生の本田正広君(国立佐賀療養所勤務)に逢い、中原迄同行す。鳥栖付近から雨となるも、夜小野田に着いた頃は雨も上る。

六月八日、寮より八時出勤、工場側の伊藤氏と逢い、生徒の動員打切りの件に付き協議す。後刻、生徒の作業中のフェノール合成工場を巡視す。

六月十四日、未明、B29来襲。退所式の日時に関し工場側と相談する

も、伊藤氏廿一日を固持す。班長の田崎君と相談し、江口部長に「部長か生徒主事来られるや」の電報を打つ。

六月十八日、早朝副島君宿に来訪、一緒に工場に行き朝食を済ます。しばらくして江口部長も見える。部長昨夜当地着、駅前桜井旅館に宿泊の由、午後工場側と協議し、廿日に退所式を行う事決定す。

江口部長宿泊中の桜井旅館に夕食後生徒全員集合、九月卒業後の就職の件に付生徒と懇談す。

六月二十日、十一時、退所式を工場食堂にて行う。学校を代表して挨拶。式後、一応当地にて全員解散す。

六時五十分、小野田駅発下り列車にて帰途に付く。途中門司にて乗換え、夜半博多を通過、空襲にて駅附近の炎上するのを見る。

六月二十七日、各都市の空襲状況から、当地への来襲も必至と予想され、在校全員出動して、学校の一部の図書、器械等の疎開準備に忙殺される。校舎の天井をはずした板を梱包材料とし、十四ヶの梱包を作る。

七月一日、新入生の入学式あり。式後小雨中を運動場にて学徒隊編成式行わる。途中空襲警報発令の為中止、十一時解除後、角尾学長の下、関兵分列式を行う。

七月十一、十二、十三日三日間で薬草園の物置小屋に二年生を指揮して学内の常時使用の分を除き図書、薬品、ガラス器具等を全部、分散疎開さす。

八月一日、十一時近く空襲警報発令、全員横穴防空壕に待避す。約三十分後敵機来襲、爆音、機銃掃射間近に聞え壕内の電燈も消ゆ。附属病院産婦人科建物に数個の爆弾投下、大穴をあけられ、医専二年生二名、

三年生一名死亡す。

八月七日、日本窒素水俣工場に動員の二年生を監督中の横山教授と交代の為水俣に出張す。この頃より長崎への空襲しきり。

午後五時二十分発上り列車にて長崎駅を立つ。鳥栖附近の車中で江口部長に逢う。

八月八日、車中にて数次の敵機来襲を受け、熊本、日奈久、田の浦等で途中停車の為水俣午前三時着の列車、十二時間延着して午後三時に着く。

日窒工場に行き横山教授に逢い、連絡、事務引継等をなす。当工場も七月末と昨七日の空爆で操業停止中、又生徒宿泊の尙和寮も七日の空襲により一部を残して全壊し、生徒等は目下自己持物等を掘出作業中との事、本日より宿舎を湯の尻温泉の昭南館に移転す。

六時、水俣市より約四キロの湯の尻温泉の宿舎に落付く。此処は海岸近くの空襲下にしてはやゝのんびりした小さな温泉町で、天草の島々をすぐ間近に見る。

八月九日、八時トラックに生徒達と分乗して一昨日空襲により破壊された寮に行き、掘出作業にかゝる。九時半警報発令の為作業を中止して海岸近くの壕に分散して待避す。十二時半解除、一部の生徒、十一時頃長崎の方向に巨大な茸型の雲煙を認めた事を報告す。午後工場本部と連絡し長崎に新型爆弾の落ちたのを知る。生徒一同の不安は拡がり家族の安否、下宿の事等を心配す。

八月十日、全員トラックにて工場に行くも九時警報発令され、午前中作業不能、午後工場に焼夷弾落下、生徒全員出動して消火にかゝる。

夕食後、宿舍のラヂオニュースにて日ソ交戦状態に入るを知る。

八月十一日、本日より工場本部に常駐す。九時半待避壕に入る。内部は山上の監視所との電話連絡、壕内放送等立派な設備に驚く。昨日帰校予定の横山教授本日夕刻発の上り列車にて帰校。

八月十三日、教次の空襲にて当工場も操業不能の爲、動員中の生徒達一時帰休さす事に決まる。

八月十四日、朝工場に行き相談の結果明日夕刻当地発引上げる事に決定す。尙空爆の爲九州本線は不通箇所が多い爲田の浦迄工場の汽船で行き田の浦から汽車利用の予定。

夕刻工場側から生徒達の面倒をよくみて頂いた三沢氏も見え送別会を行う。アルコールも入り学徒の意気大いにする。

八月十五日、生徒代表と工場に行き工場長、次長に別れの挨拶をなす。十一時すぎラヂオは重大発表のある事を数回知らす。正午、君が代放送の後、玉声にての大詔を拝聴す。全員炎天下脱帽肅然として聞く。余り良く聞きとれず、しばらくして終戦の事が判る。

午後湯の児の宿舍に帰り、帰路の弁当を宿舍の主人に依頼せしも承諾を得ぬ爲、坂本君を工場迄派遣し亦田の浦迄乗船予定の船を島原迄の延長方も依頼す。

五時坂本君帰寮、万事好都合に事が運びはつとす。鹿児島に帰省の福井君を残し七時三十九名の生徒、工場の第二水俣丸に乗船、しばらくして出航、夕やみの湯の児を後にす。風なく波静か、十時頃三角に寄港、三角の街の火点々を見ゆ。

八月十六日、予定を変更して、大牟田に向う。同港に深夜頃着、港外

に仮泊す。夜明を待ち、寄港して糸山君外十八名(佐賀福岡方面の生徒)下船。全員校歌を高らかに合唱して別れる。

七時半湯江に着き、船長に昨夜来のお礼を云つて下船す。当地にてやつと長崎の原爆の被害状況や、判明し医大附近が中心地らしい事を知る。十一時島原線深江駅発上り列車に乗車す。諫早駅にて偶然にも杉浦教授夫人に逢い、薬学部の被害状況と共に杉浦君の被爆に逢うを聞かされ慰めのすべを知らず。又清木先生は薬専横穴壕にありて、九死に一生得られしを知る。二時道の尾着、此の附近より周囲の山も木々の緑も褐色に変つてゐるのを見る。三菱兵器附近から原爆の威力に目をみはる。大学附近を中心とし一面焼野原と化し、医大病院の巨大な煙突もくの字に曲り悲惨を極む。プラットホームのみの浦上駅を過ぎ、焼失し尽した長崎駅着。出発の時に比べ、余りにも変り果てた長崎の姿に暗然となる。

以上はメモがありましたので転記してみました。

帰崎後二、三日して、医大本部に出頭し、各地よりかけつけた生徒遺家族の応接に当りましたが、御父兄の御悲歎の様子に顔をそむける事幾度かわかりませんでした。

清木先生、富田君等の手により仮埋葬されていた薬専生徒数名の遺体を伊藤、田崎君等(長崎在住)とで横穴壕の近くへ運び、何一つとして思う様にならない当時だったので、焼けのこつた鉄製のベッドにのせては冥福を祈りつゝ焼きましたが、腹部はなか／＼やけなかつた事を記憶しています。終日かゝつて遺骨を集めました。勿論骨壺などあるはずはなく、生徒名を聞いては石油缶におさめ、木札を立て、埋葬する有様で、此の焼野原では一本の草花すらたむける事が出来ませんでした。



八月二十日頃より医大本部は桜町の商工会議所の一部を借用、再建の一步を踏みだしました。

八月末、雲仙にあつた海軍病院の薬品、医療品等を接收のため、富田池田君、薬局の菊野君、医専の生徒三名等と共に愛野より徒歩で雲仙に寄りました。宮崎旅館に宿をとり、雲仙の数ヶ所のホテルに分散していた元海軍病院薬品等を旅館からリヤカーを借用して、有明ホテルの近くにあつた三菱造船所の寮に集積しました。之の作業も二週間余りで終了したので、トラツク数台で長崎に運びました。被爆後の医大病院再開にこの時の薬品、医療品は大いに役立ちました。

九月に入り、長崎在住の生徒もほち／＼集合しましたので、薬専の焼け跡の元薬品庫地下室に焼失を免れたバイルシタイン等の圖書の運搬にかゝりましたが、医大校内は焼け残つた建物、樹木等の為校内に車が入らず、運び出すのに大変苦勞しました。此の際、生化学研究室の地下室に其儘放置して、散乱していた化学関係のペリヒテ等の文献も一緒に運び出しました。之等は勿論医大医化学教室所有の圖書でしたが、私達が運搬せず、其儘放つていたら多分一冊も利用出来ず散逸してしまつたでしょう。之の地下室に入つた際は沢山の書籍が土足のまゝで踏み荒されていきましたので、見るにしのびず運び出したのでした。

九月末、新興善校の一室で、昭和二十年度卒業生の卒業式がありました。卒業生の半数、二十三名が原爆の犠牲となり、此の式に列席し得たもの二十名余りで、悲しみに包まれた淋しい卒業式となりましたが、此の様な卒業式は二度とないでしょう。又此の式の際、清木先生と共に横穴壕に残り、吾身を省みず、原爆に斃れた同窓の友を最期迄よく面倒

をみた富田恒夫君に特別の賞状が授与されました事を附記しておきます。以上たゞ／＼しく書いてみましたが、記憶がうすれてしまつて、前後している事もあると思います。

(国立兵庫療養所)

以上

## 忘れ得ぬこと

江口虎三郎

本日梁井長崎大学薬学部長より御手紙を頂きました。早速開封いたしました所長崎が原子爆弾被爆後此の八月九日を以て満十周年になる。就いては原爆十周年記念事業の一部として記録を作製する事になつたので、私に原爆当時の史実に就いて執筆を頼むとの事でありました。

当時私は附属薬学専門部長の職にありましたので、私に此の依頼をされた事と思いませんし、又御希望に答える事は私の義務と考えます。所が私は被爆の時公務の為め出張して(後で記載)長崎に居らず、帰崎いたしましたのが十二日午前二時でありましたので被爆時及び其の直後の状況を知る事が出来ませんでした。

又可愛い生徒諸君の現世の別れにも居合わず、此の事は十年経つた今日尙ほ自らを責むる胸中の桎梏となつています。

以上の次第でありますので私は十二日帰崎の後聞いた事見た事を基とし其の前後の学校の様子、私の行動を記してみたいと思えます。

言葉に表わしようもないあの時の惨憺たる地獄絵巻の記憶は未だに生

々しく終生私を悲しませる事でありましょう。

昭和十二年七月勃発した支那事変は同十六年八月八日米英の参戦と共に第二次の世界大戦となり、戦況は日を追つて苛烈なものとなりました。学生、生徒（医科を除く）も国を挙げての護国の一端を担う事になり、学徒動員の名の下に各工場に配置され、生産の一翼を分担する事になったのでありますが、戦は日々に不利を重ね敵機の来襲は頻繁を極め、全国都市の殆んどが破壊の淵に臨む状況となり、昭和二十年に入つては悲しくも我が国の敗戦は愈々濃くなりました。

当時我が薬学専門部は角尾医科大学長の下に私が部長を勤め、清木、横山、一番ヶ瀬、杉浦の諸君が教授の賑にあり、河野、秋山両君が助教授で、医大の方より薬理、解剖、生理、細菌、衛生の先生を、高商より修身の先生を講師に御願ひ致して居りました。

生徒は一年生が長崎飽の浦の三菱電機製作所に動員。二年生は熊本県蕨北郡水俣にある日窒工場に動員して居りました。三年生は福岡県築上郡吉富町にある武田製薬の吉富工場と、山口県小野田市にある田辺製薬の小野田工場に半数宛二班に分れて動員して居りましたが、卒業期が九月でありましたため七月末工場を引き上げて帰校し、卒業迄残る数十日を学業の整理に専心して居りました。

私は此の三年年の諸君の事を思うと胸がつまる。

在校二年有半、それも苛烈な戦争の最中の事として学業に専念する事も出来ず、工場に動員して工員にもおとらぬ労苦を嘗めねばなりませんのでした。

それでも卒業をほんの間近に控え、楽しい学び舎に帰つてノートの整

理等にいそしむ諸君は過ぎ来し労苦も楽しい思い出ではなかつたらうか。譬え短かつた学生々活とは云え卒業後の夢も胸中去来するものがあつたらうに。十数日の後生命の危厄に逢わねばならぬ事を諸君の誰が想像し得たであらう。

私は涙が止め度もなく流れる。

敵機の来襲は益々其の度を加え長崎は八月一日B 29数十機の爆弾攻撃を受けました。

此の時大学病院にも数発の250キロ爆弾が落下して医科の学生に四、五名の犠牲者を出しました。

薬学専門部では兼ねて玄関向うの狭尺射撃場標的の所と其の右横の両所に出入口をつけ、山の中央に向つて防空壕を掘鑿して居りました所、實際爆弾攻撃を受けて不安が増し専門家にも尋ねてみました所、我々の壕では250キロ爆弾に対しても不完全だとの事でありましたので、在校中の三年年の諸君に命じ急を要する所から昼夜兼行の意気込みで防空壕の再掘進にかからせました。

当時私は一番ヶ瀬、横山両教授と共に軍の研究員を命ぜられていて、八月八日福岡の西部軍管区司令部で、初の打合わせ会が開かる旨の通知を受けましたので、最初の会であるから上記両教授と共に三名揃つて出席する事にいたしました。

一番ヶ瀬教授は学校にいましたので此の事を告げ、水俣の日窒工場に二年生に付添つていた横山教授にも此の事を電報で知らせ、交代期にもなつて居りましたので工場の方へは秋山助教授に行つて貰らう事にいたしました。

私は防空壕の掘鑿並に崗守中の校務を清木、杉浦両教授に依頼し、六日長崎を立つて福岡に向いました。

八日は午前八時西部軍管区司令部の会場で一番ヶ瀬教授に直ぐ逢いましたが、横山教授はついに出席しませんでした。何か支障が生じて来る事が出来なくなつた事と私達は想像するのです。

同日の会議は研究事項に就いての外、生徒の動員に就いて軍より塩が非常に不足なるにより製塩に生徒を向けて呉れないかとの話がありましたので、其の要請を受け入れ其の頃唐津の草場君(長業昭和六年卒)が製塩事業を始めたとかの噂を聞いていましたので若しそうだとすれば唐津の同氏工場に生徒を向け度いと思ひ此の事に就いて軍の諒解も得ました。

同日の会議は夕方七時頃迄続けられたと記憶する。

会議を了えて直ぐ福岡を立ち三田川の私宅迄帰り父の下に一泊しました。

明けて九日昨日の会議に於て打ち合わせた製塩工場動員に就いて草場君の所の状況等速かに知る必要がありましたので佐賀県庁に行つて調べてみる事にし、十時二十分頃だつたでしょうか靴を履きかけて居りました。

其の頃小型敵機が不意に出て来て、汽車を撃つ事がよくあつて汽車で佐賀迄行くのも安心はして居れませんでした。

丁度靴を履きかけている時ラヂオがけたたましく鳴り出して、長崎の……と云ひかけましたのでハットして聞き入りました。

長崎市民は早く退避せよ、早く早く早く、

長崎附近の者も早く退避せよ

と繰り返えし非常な緊迫感を以て告げるのでした。

之を聞いて私は突嗟に、長崎は今艦砲射撃を受けているんだと思つたのです。所が暫時のラヂオは今敵が原子爆弾を以て長崎を攻撃中と報じ、次で、

長崎市民は早く防火につとめて下さいと云うのでした。

此数日前の八月六日に広島が原子爆弾で壊滅しましたが、此の時軍や政府では原爆の如何なるものであるかに就いて発表する所か、國民にはひた隠しに隠す事に汲々としていたようである。広島の壊滅的打撃は全然発表せず、

敵が広島に新型爆弾を落した。之は而し恐るゝに足らず蝟壺を握り其の中に入つて上から湿つた布か蓆を被つて居れば大丈夫。

之れが其の時新聞等に出された当局の言だつたと記憶します。従つて原子爆弾が如何なるものか当時私共はよく知らず、殊にあれ丈ラヂオが注意したのだから、長崎市民も今度は完全に待避した事であらう。生徒諸君も私の長男宏(医大二学年在学)も妹親子四人(此の中長男一馬は薬専二学年在学)も無事であるに違ひないと固く信じ込むのでした。

私はどこに行つてもラヂオが長崎空襲警報発令を知らせると心配でならず急いで帰着するのが常でありましたが、此の時ばかりはラヂオの「長崎市民は早く待避せよ」と云う言葉がいつもとは違つて強く響いたので、全部完全に待避したものと思ひ込み、佐賀県庁に用件もあるので早速帰着する事をしました。

翌十日には切符を売らず、十一日道の尾迄の切符を入手して午後五時過ぎの汽車で長崎に向いました。

時間表の上では五時何分ですが、前日の十日に鳥栖駅が爆撃を受け、此の日も汽車は中原駅より折返えし運転をして居てダイヤは崩れて居り、約二時間遅れて七時過ぎに発車したように記憶する。途中でも亦非常に遅れましたが、湯江駅で人が乗り込んで来て私の隣に掛けましたので、早速其の人に長崎の様子を尋ねました所、自分はまだ長崎に行つていないけれ共浦上方面は言語に絶する惨状で何んにもない様になつてしまつているとの事、又居た者は全部死んでしまつている相だとの話、私は此の時全身水りつくような震えを覚えました。

之迄大丈夫と信じ切つていたのに此の一言は一瞬にして私を奈落の底に落したものでした。

学校は全滅しているのじゃないか、先生も生徒も皆なくなつていゝのではあるまいか、等々思案に耽つて諫早駅に着きました。

ここで又女の人が私の側に乗り込んで来ましたので、直ぐ又尋ねました所此の人は竹の久保の人で原爆々発の時幸運にも防空壕を掘りつゝあつて其の中に入つていた由。

ところがピカツとして耳をつんざく音がしたので壕の口のあたりに爆弾が落ちたのだと思ひ、入口の所に行つてみたが其の様子はなく外は視界が暗黒になつていた。間もなく浦上一円方々に火の手があがつてそれからあちこちと逃げまわつたが、あの時はほんとうに地獄も斯くやと思われたとの事でした。

ここで私はもう何も彼も駄目だ。学校も焼けている。先生も、生徒も、宏も、妹達も皆死んでいと悲しくも信ぜざるを得ませんでした。道の尾に着いたのが午前一時頃であつたらう。

下車しようと思つて頭上の棚に乗せていたカバンを取ろうとした所ありません(車中は消燈していて真暗)、どう探してもないので駅員からランプを借りて来て探したけれども遂に見付かりませんでした。

此のカバンには之ればかりは焼いてはならぬ必要な書類を入れていて常に身邊に持つていたものです。

之れで私は又ガツカリして縁起を担ぐのではないけれども一層暗澹となるのでした。詮方なく午前一時半頃道の尾駅を出てトポトボと長崎に向いました。

長崎の方を見ればまだあちこち燃えている様である。

長崎の方よりリヤカーに夜具をのせたりして三々、五々やつて来る避難者に行き交う。

西浦上のあたり迄来たら被爆の跡は生々しく、家はなく、道には瓦礫散乱、電柱倒れ、家の焼跡、瓦礫の堆積せる間より青い火を噴いているのがあちこちに見える。人間が焼けている様な臭いが鼻に来る。城山方面にはまだ燃えている所がある。大橋を渡る。

私の住んでいた松山通りに来た。勿論一面焼野が原で、矢張あちこちに青い火がポツポツと出ている。妹達が(妹親子も私と同居)あの火の中で焼かれているような気がして合掌する。

私は松山通りから浦上の教会の方へ入つて行き学校に辿り着く積りであつたけれ共、そんな生やさしい状況ではなく、道などありはしない。

下の川橋迄来たら橋の上に四、五人の人が話して居らるゝ、私も煙草の火を借りて暫らく爆発当時の模様を此の人達から聞いた。

八日の午前十一時一寸前、其の時は空襲警報が解除になつて警戒警報

発令中だつたとの事で、防空壕に待避していた者も外に出た矢先であつた。而し空には少数機の爆音がブーン聞えていた相である。

私が佐賀で聞いたラヂオの放送ばかりでなしに、空襲警報が解除になつて市民も壕より外に出、やれやれと汗を拭いて間もなくの事、黄紫色の怪光一閃、あつと云う閑もなく家は皆な押し潰され、其の範圍は北は殆ど道の尾の近くから、南は長崎駅の近くに及んでいるとの事でありました。倒された家からは間もなく火を出して火の海と化した由。

人は爆発時の数千度に達する高熱に晒されて即死した者も多かつた。半死半生の者が水を求めて川辺に這い寄り、あちこちから「助けて呉れ」と救いを求める様はほんとうに生き地獄と云う外云い表わし様がないと云つて居られました。

此の人達から聞いたのですが病院では炊き出しがあつている由。それで病院に行つてみる事にし浜口停留所の所迄行きました所、又四、五人の人が担架を担いで話して居ました。

私が丁度そこに行つたので「あなたはどこに行きますか」との事、病院に行くと言へた所、其の中の一人が此の人達は島原の人で子供さんが負傷して病院の裏門のあたりに寝ているらしい、此の人達をそちらに連れて行つて呉れませんかとの事でありました。

それで一緒に参りましょうと云つて病院に向いましたが、真暗がりの中であつたけれ共病院に上る石畳の道も別に物に蹴躓く事もなく玄關に着きました。(此の朝顔洗いに病院下迄下りました所此の石畳の道に人間の死体五つ六つ、大きな馬の死体が一つころがつていたのには驚きました)玄關前に席を敷いて寝ている者があるので、学生諸君と思ひ起し

た所それは兵隊さんで久留米から兵隊さんが救護の爲め来て呉れているのでした。私は先づ島原の人達を裏門迄送らねばならない、それで兵隊さんに裏門に行きますかと尋ねた所自分達が道を開いたので行けますとの事、私は突嗟にそれは元通路であつた崖下の道であろうと思つてそのの方に案内して行つたが通れる道にはなつていない。

瓦礫は散乱電柱や針金も錯綜し、動物の腐敗臭が鼻をつく、とても通れるような所ではない、島原の人に非常に気の毒な思いをしつゝ眼科の処迄どうにか辿りついてやつと裏門の所に出た。近所に呻き声が聞える。島原の人が探して居らるゝ子供さんの名前を尋ねて其の名を呼んでみるけれども返事はない。

何度も呼んでいた所女の声で「直ぐその防空壕の中に大学生がなくなつてそこに人が居らるゝから行つて尋ねてみなさい」との事、何せよ真暗でどこがどこやらわからず、仕様がなかったので夜の明けるのを待つ事にし、暫らくやすみましようと言つて地べたにゴロリと寝ました。午前二時半になつていたろうか。

一寸ウトウトしたように思う。東の空が少し明るくなつた様な気がしたら学生らしい者の話し声が聞えて来た。

私は直ぐ起きて其の声の方に行つてみた所矢張大学の学生でした。それで二年生の江口宏がどうしているか知らないかと尋ねました所、知らないらしく、こちらに幾人も寝ていますから見に来てみなさいと云う、ついて行つた所は眼科の地下室である。

ここに二、三十名の学生が收容されていましたが既に事切れている者もあつたように思う。

ひどい負傷の者、苦悶に堪えず呻く声。

誰が誰だかわからない。

蠟燭をつけて一人一人調べてみたけれど共宏はいない。

ここに思いがけなくも解剖の佐藤助教（現教授）が居られた。

それで早速宏の事を同氏に御尋ねした所「江口は無事でいますよ玄關のあたりに居りましたよ」との事、

此の一言は私をどれだけ喜ばせ元気づけたかわからない。宏に関する限りすつかり安心して、夜が明けるのを待って玄關に行つてみる事にしばらく佐藤氏と話し、明るくなりましたので玄關に行つてみました。所がここで又思い設けぬ松永君に逢いました。

同君は昭和十五年薬学部卒業後医科に進学され、卒業後軍医になり久留米に勤務、今度こちらに救護の為め兵隊を引率して来ているのです。

同君は出会頭に私に「先生御心配ですわね」と云う。

私は又電撃を受けたような気がして「どうしてか」、

佐藤氏は先刻「江口は無事でいる玄關あたりにいる」と云つたので、負傷者の世話をしてやつているのだらうと思つて「今探しているのだが」と申しました所、松永君は「それが」と云うのでした。

どこにいるかいる所に行つて呉れと云つて同君について行つたのですが、それは高北病棟の地下室でした。

ここにも二、三十名の負傷が收容されていたでしょう。中には既に息絶えて居る者もありました。又全身火傷の為め誰であるかわからないような者もあり、苦痛の為のたうちまわつて半狂乱の叫びを上げている者もあり、阿鼻叫喚の巷でした。

宏はここに寝かされていましたが、見た所一点の傷もなく私も大丈夫だらうと思ひ胸をなで下すのでした。

而し普通じやないと思ひましたのは小用にも一人立つのに困難の様であり、私が支えてつれて行くのですが全身がビリビリ震えていた。

之れはどうもただ事ではないかと私も内心心配でした。私は被爆直後の学校の様子に就いて非常に聞き度かつたのですけれど共宏の元氣回復を待つた上で我慢して尋ねませんでした。宏より聞いた事は「ねーお父さん、あつと云う暇なかつたよ」と唯之れ丈でした。

ここに病院薬局の真野君も寝ていました。

又私の側に全身ひどい火傷で誰だか判別出来ぬ学生がいました。私が宏と話をして聞いているのを聞いて此の負傷者は私に「江口先生でありますか」と云うのです、其の声で私はハツとして「君は野口君じやないか」と云うと共に涙を止め得ませんでした。

同君は昭和十八年附属薬専卒業で、直ぐ医科に進学し三年生だつたと思ひ、同君が私に云つた最後の言葉を私は忘れる事が出来ません。

「先生私は死にませんよ敵を打たずには私は死にませんよ」と叫ぶのでした。私も「そうだしつかり元氣を出せ」と心から同君の回復を祈りつゝ激励いたしましたが間もなく原爆の犠牲となつて行つた事と思ひます。

宏の直ぐ側に宏の同クラスの学生が寝ていました。同君の姓名を聞き洩らしましたが江口江口と宏を呼びつゝ息を引き取つて行きました。

此の情景の中にあつて宏の心中はどうであつたらうか。

それを思うと私は堪え難い。

やがて間もなく自分も同じ運命を辿るであろう儂しさを悲しまなかつたであろうか。私は学長に帰学の報告をせねばなりませんでした。

学長は負傷して外科病棟側の防空壕の中に寝て居られましたが、顔、手、足に繻帯を巻かれ血も少々滲んでいるようでしたが、ひどい負傷ではないように思いました。

こんな事とは知らず帰学が遅れてすみませんでしたと申しました所、原爆の恐ろしい事を述べられ「学校はすっかりなくなつてしまつた。なる可く早く仮校舎を見付けて授業をするようにしようね。又君の方は宏君がやられている相だから十分手当をしてやりなさいよ」と云われました。それで私は「先生も元氣を出して一日も早く達者になつて下さい」と云つて辞去しましたが之れが学長との最後の別れになつてしまいました。

学長は此の日夕刻道の尾の或る神社の社務所とかに軍用バスで移されました。

学長は以上の如くでありまして、学校壊滅と共に基礎の先生達は全部犠牲となつて居らるゝとの事でありまして、古屋野先生が学長に代つて采配を下して居られました。驚天動地の出来事に全く手のつけられぬ状況でありました。

宏は十三日高北病棟の地下室から小児科病棟の地下室に移しましたが、容態は急速に悪化し、高熱を出し、次で猛烈な下痢が起り「お父さん心配ばかりかけてすみませんでした」と御礼を云いながら遂に十四日の午後九時五十分息を引きとりました。

思いも設けぬ出来事で突如として杖、柱と頼みに思つていた長男を失

つた私は茫然として自失、魂も抜けた如く唯子供の死骸に縋り付き抱きよせ一夜を過ごし、十五日朝海江田博士父子に御世話して頂いて茶毘に付し、遺骨を携えて郷里に帰りました。

突然遺骨となつて帰つて来た宏の姿を見て祖父、妻、子供等の驚愕譬うるに物なく祖父は氣を失つてしまいました。

宏の遺骨を安置、正体もなく疲れた体を数日養つて長崎に帰りました。角尾学長が死去された事を聞きました。

先に十二日朝学校に帰つたものゝ私の留守中を頼んで置いた杉浦教授は爆死を遂げた様子であり、清木教授は負傷して長崎をはなれて居るらしく、病院收容者の中に専門部の生徒は一人も居らず、外の先生ともよく連絡つかず、一方宏は命旦夕に迫りつゝあると云う様な訳で、焦躁に駆られつゝも専門部の状況をつかむ事が出来ませんでした。

今度帰崎し調べた所によりますと、教日前より引き続き八月九日も私よりの依頼の旨に従い、三学年の生徒も清木、杉浦両教授が監督して防空壕の掘進をやつていた、人数の都合上二班に分けて作業時間を定め一班が掘れば其の間二班は休憩する仕組みだつたとの事、丁度午前十一時二分頃原子爆弾は爆発したのであつて、其の時外で休憩中の諸君は不幸にして原爆の直撃を受け即死又は瀕死の重傷を負い、間もなく総て犠牲になつてしまつた。

壕内にあつて作業していた者は幸いに難を免れました。

清木教授も壕内で作業していられた相で軽傷を負われた丈でした。

不幸にして若き生命を失つた者は卒業するばかりの三学年の諸君二十三名、二学年で病弱の故を以て工場に動員せず学校にいて研究の手伝を

していた四、五名の諸君でした。

私は之等の諸君の事を思うと真に断腸の悲しみにひしがらる。未だ桜も蕾、やがて学業を了え各々の理想を胸に描いて社会に雄飛の日を夢みていたろうものを。

又私も御父兄最愛の子息を預り、奇しくも師弟愛の縁を結び、微力とは云え我が子も同然に毎日を共にし立派な社会人としての成長を願ひ期待して来たものを。

私の甥（妹の子供）も二年生で病後の故を以て工場に動員されず、学校に残つて研究を手伝つていて被爆死去いたしました。

此の方は遂に死体の確認も出来ませんでした。

私は戦況益々不利を重ねて参りました頃、長男宏と此の甥を呼び今度の戦争は重大な結果を招き相である、負けるのではあるまいか、愈々と云う段になれば学生生徒も戦線に馳せ参んずる事にならぬとも囃られず戦線に立てば生死の程はわからない、国の為め是非なき事とは云いながら、おまえ達は年老いた私より先に死に臨む事なきにしもあらず、不断の覚悟肝要だと云つてきかせたのでした。

而し斯る死に方を誰が想像したでしょうか。あんな事を云いきかせていた私を私はうらめしく思う。

私の愛する二十数名の生徒諸君も、宏も、唯無念であつたらうと又胸がつまる。

先生では山下教授が病気で精神科に入院中でありましたが病室でなくなつて居られます。

杉浦教授は聞く所によりますと学生諸君と共に防空壕を掘つていたが

来客があつて温室に案内していた由。

何の用件だつたか知る者がないので、温室の外から窓を開いて手を入れ何か取り出す積りだつたらしい、其の時、被爆、手を窓枠に挟まれたまゝ死したのです。

後で此の手を窓より外ずそうとしたけれ共どうしても外ずれず同君は其のまゝ茶毘に付されたと聞きました。

永く薬学専門部の事務室に勤めて呉れた人に松尾滝子さんがありました。同女は九日朝疎開の為の荷物を車で時津に運び、將に自宅に帰着の寸前被爆死去。

小使が二人小使室で死去。

私は呆然として唯夢の如く現世の出来事とは思えませんでした。而し又一方から考えてみますと、私共は之れでまだ幸いだつたかも知らないと思ふ。あの日のあの状況の下に於て例え防空壕を掘つていなかったとして全部が壕中に退避していたろうとは思われません。皆外に居たに違いないと私は想像する。

又福岡で会議がなかつたとすれば先生達の様子も違つていて全体として被害はもつともつと大きかつた事と思ひます。

校内を一巡しますと、建物では薬品庫が半壊のまゝ残つている丈けで外に一物も残つて居らず、焼跡には一面に純白雪の様な結晶状物質で被われ、足を踏み入るればザクツザクツと云うのでしたが之は何か？

防空壕の側ここは壕掘りの際生徒諸君の休憩場であり悲しくも亦死場所になつた所ですが、諸君はこゝで茶毘に付され各々父兄に引き取られて我が家に帰つて行つたのです。



中央に少しく土を盛り上げて小さな木片の墓標が立てられていました。私は香花を供え諸君の冥福を祈るのみでした。

十五日正午終戦の詔勅は煥發されていました。

私共は悲しみに打ちひしがれてばかり居られませんでした。

三年生は九月卒業です。学校は跡形もなく潰え去つたとは云え一、二年の生徒諸君がいます。

学校を如何にするかと云う事が私共に取つての重大な課題でありました。残存教授、助教授諸君全員集合、此の問題について協議を重ねる段取りとなりました。

教授の中には斯くなる上は我々の薬学専門部は解散する外なく、生徒は他薬専に分割收容して頂くようにする外なしとの意見を抱く者もありましたが、私は其の意見には絶対反対で、一日も早く仮校舎を設営し、授業再開の目標に邁進する事と致しました。

大学としても其の方針は同様でありまして、桜町市役所に事務所が設けられ古屋野学長代理の下に頻繁に協議を重ねられて行きましたが、迂余曲折を経て薬学専門部が佐賀に仮校舎を設けて授業を開始したのは同年十月一日であつたらう。

## ▽ 体 験 記 △

### き の こ 雲 の 下 で

清 木 美 徳

昭和二十年は大戦が始つて四年目の年である。戦の容相も次第に深刻になつて、ラジオの放送は刻々と不安さを伝えるようになった。

今年は何の年であるから元旦には探幽の竹鶏の軸をかけてみたのであるが、この日本の古さを見るにつけても、今年は何のようないことが起るのであろうか、非常に心配で又それ恐ろしい気もする。月が進むにつれて果して不安は増すばかりである。吾々の毎日は何かと言つて目が廻るように多忙であるが、防衛については何一つ安心の出来るものがない、このままであつたら大学数百名は爆死を待つようなものだ。学生主事として学校防衛を担っている自分には、それは耐えられない責任と思つた。そうだ吾々の力で思い切つて待避壕を作ろう。こう考へて教授会に提案した、皆も快く賛成してくれた。だが時は二月の初で霜は厳しく氷のはつた水溜りに泥まみれになつて壕を掘るのは仲々である。

場所は図書館の横の松の下の狭尺射撃の監的壕の底から十米の横穴四本と、その先端から直角に二本、これも十米位で弓道場の裏に抜けるようにした。先生達も生徒もよく協力した。

或る日泥にまみれて学生と作業をしていると一通の電報が届けられた。

それは日頃より病を得ていた兄の死報であつた。永い間苦業を共にした兄の死であつて見ると、居ても立つても居られない。だが一日の作業が遅れると思つたと又たまらない。こんな気持で帰郷、棺を送り出すと同時に家を出た。遅れ勝ちの汽車を待つ間に近くの火葬場の煙が見えた。六月頃になると爆撃は愈々盛になつてきたが、その頃壕は大体完成していた、学長も大変喜んで視察された。そこで愈々第二期工事の話が定まつた。

長崎の空襲は四月頃一回と七月三十一日、(この時は川南の壕で助かる)八月一日と三回あつた。八月一日のは相当な被害で自宅の附近や病院が爆撃され学生も死んだ。この日三菱電機に出動中の学生を見廻りにも行つたが途中は所々に大穴があき、竹の久保あたりの電車レールはへし曲つていた。病院へは土まみれの女の死体等が次々と運ばれ、学生が一人々々手当していた。

昭和二十年八月九日(木)この日朝より天気晴朗で空には薄い白雲が点々として浮いて、気温は二十七、八度位で可なりの暑さがあつた。大講内老樟、梅檀、桜の並木には耳を聳する蟬の音である。午前九時頃薬学専門部に通ずる石畳の道の桜の青葉のトンネルの中から杉浦教授が国民服に弁当箱をぶらさげて登場、氏は今日、三年生を引具して壕掘作業の主役を引き受けているのである。今日三年の作業は一部は薬品庫地下室の外国図書整理、他の一部は薬草園の手入れ、その残りは全部壕掘作業になつている。江口、一番ヶ瀬、横山の諸教授は福岡市で軍との研究打合せの爲めに出張中で学校には自分と杉浦氏が留守番である。一年生は三菱電機工場に、二年は水俣の日本窒素工場に動員して不在で

あつた。

その外学校には小使の山本、横瀬の二老が居るだけで事務の松尾氏はまだ出勤していなかった。後で聞くと道の尾にミシンを疎開させて帰つて家の上つたとたん被爆したとか父君が語っていたが十日許りで死んだ。

午前九時三年生は例の校舎前の広場に二列横隊に集合、級長の荒木君は杉浦教授に人員二十九名と報告して、全員と共に敬礼した。教授は短い手をちよろつと挙げて答礼した。次に人員の割当である壕掘の出来ない者は前に出よと命ぜられ重本、松本（忠）、武田、岩本、川浪、臼井の六名列前に出、彼等は薬品庫の図書整理に向つた。又菓草園に極小数と残りは壕掘に向つた。

被爆後図書組と壕掘の一部が助かつたのであるが、このようにして死ぬ者と生残る者が知らず知らずに生別したわけである。

このような有様は自分の研究室からよく見えたのである。その日、自分は九時より十時まで医専一年の第一組の数学の時間で、黄色の麻の服を着て新講堂で講義をした。授業中、警戒警報が鳴つたようだ。

玄關左脇の六坪の自分の研究室は昨日三年生が模様姿をしてくれたので何となく珍らしく広々とした気がする。十万ボルトの大変圧器も高机の上上げ寝台も持ちこんだ。一米角位のコンクリートの微量天秤台には電気コンロをかけ中食の用意をした。三十分後に充分出来上るのである。こんな用を済して氣に掛る壕掘に出掛けることにした。出来れば皆と一緒に少しでも掘りたいと裸体になつてパンツ一着に及んだ。この時何と考えたか自分でも解らないが、待避でもないのに薬品や通帳を入れて救急雑囊及鉄カブト等を持つて出掛けた。

このようにしていつもの通り壕の一番奥で交代に壕掘る順番を待つた。

そこにはベンチがあつて左より寺戸、清木、椎名、富田、池田と並んで広島に特殊爆弾が落された話をしては真疑を疑つた。掘り番は柏君でその前は田中君であつた。これより先柏君は水飲みのため銃器庫の前の水道栓の処に行つた。すると銃器手入れの岩本君が鎌を研いでいた。柏君を見ると「あんた方はきついですね」と愛想を言つた。これが恐らく岩本君何十年かの学校と盛衰を共にした奉公の最後の姿である。壕へ帰る時上半裸体の学友が一名宛都合二名柏君の傍を過ぎて正面玄關より校舎に入つて行つたが惜しいことにその二人の名前が思い出せない残念があつた。それは後に述べるように被爆後この内一名は突当りの応接室に、今一人は事務室の出口の処に焼け死体となつて現われたからである。

水飲みに約五分を費した柏君は裸体のまゝ壕に帰り田中君と交代して二三回銚を振つた頃、そして田中君はようやく壕を出たとたんの事である。この時それまで遠くでブーン、ブーンと音をたてていた飛行機の音が一層はつきり聞えたので自分は皆の話を制した。それと同時に、ゾー、ゾーという落下音が聞えるではないか。「皆身体を屈め」と命じた。一同腰掛板より下りて身を屈す。一秒二秒……柏、富田君は黄味を帯びた異様な強光を感じた。そのとたん「ズドーン」と大地が一時にくづれ落ちる様な音が壕内に響いた。皆一時にワーツというような、異様な大声を出したようであつた。壕内の電球は爆発して真ッ暗、壕の内張の板で頭をいやという程打つた。落磐のように土の雨が降る、眼鏡は泥で真ッ黒に曇つたが不思議にふつ飛びはしなかつた。富田君の伏せた上には池田君がのしかゝる。柏君はポカーンと立つている。(勿論このような

有様は何一つ見えないが後で調べてわかつたことである。」

その時富田、池田の両君が「先生出口はあいています」とさげんだ。見ると出口がぼんやりと黄褐色の埃の中に見えた。自分や柏君は出口である排水壕の方に馳け出した。この時松本（登）君が「ヤラレタ」と言つて、よろけるように入つて来た。そして壕の一番奥にいた富田君にしがみついた。富田君が氣付いて薄明りで見ると全身火傷の同君は人相が全く変つてゐる。早速射撃場側の壕の通路に運び敷板の上に寝せた。彼は「痛い、ユツクリヤツテクレ」と言つた。

壕の外を見渡すと、外で土運びをしていた学生は足を投げ出し、髪、眉毛は焼けて土にまみれ足の皮は桜の木に空砲を打ちかけたようにはげ、それが足の裏側だけにくツついてわらじをはいたように見える。

皆口々に「先生やられました」と呆然としている。向うには谷葉局長の娘さんが髪もおぼろに口から血を出して実に悲惨である。大学の建物は柱を取り去られ地に落ち伏し処々に煙が立ち登つてゐるし、後の松山の木は皆倒れている。大気は日食のように暗く気温は二〇以下であろう。柏君はこわれた医化学教室の階段教室の側を通つて専門部の方に急いだ。同教室では授業中の学生が階段にずらりと並んだまま首をかしたようにして死んでゐるらしい。「オーイ」と声を掛けが返事は勿論身動きする者も居ない。

壕の出口に立つた自分はこれはいけない。「君等は早く壕内に入らんか早く、早く、焼け死するよ、早く行こう。」とはげました。それでも立上る学生は一人も居ない。目も見えないようである。仕方がないので一人一人を担いで壕内に運ぶ決心をした。壕の入口の段々には釘のさゝつ

た板が爆風で沢山運ばれ、それが素足に一寸程もさゝるが少しも痛くない。何本もこれを抜いた。こんなにして大体運んだように思われた頃火は倒れた建物に拡がり、そのため入口から熱風が吹き込んで来た。まるで壕内は火焰噴射器の攻撃を受けてゐるわけである。このようにして壕の外に居た者は或は山の方に逃げ或者は壕に收容した。山の者はその後死亡したのにその場所が不明で実に残念である。

壕内の負傷者には水が飲みたい、傷が痛い、寒い寒いと叫ぶ者もいる。だが泥水より他に与える水もない。壕内に居て助かつた五名の学生は皆自分の着物を傷ついた学友に与え、一片の布も着けていない者も居る。自分は壕内に渦巻く火焰と共に吹きこむ木材を掴んで壕外に投げ返していたが火勢は愈々つのる許りである。

この時身体を木材でしたたか打たれた様な気がすると共に急に力がなくなつた。万事休す、裸のまま壕の角に横たはり天井に沿つて走る火気をさけた。又火の粉をさけるため全身に泥を塗つた。壕内は負傷のうめきと外の火の燃え盛かる音丈で他には何一つ聞えない。今まで音響で彩られていた外界は無声映画の様に死の底に沈んで行くのである。

自分はこの悲痛な時の移りを時計で調べて見ようと思つて時計を探したが先程脱いで与えたパンツに入れていたのでそれを求めたが学生はしつかりそれを抱いていたのであきらめた。

何時間たつたかそのうち火勢は次第に弱つて来た。負傷者も疲れがひどく、静かになつたので富田君と二人で救いを求める為、大講堂裏の本部壕に出掛けることにした。それは先程一、二の連絡学生を出したが、そのまゝ帰らないのが氣になつたからでもある。

途中にある、被爆前足の踏入れも出来ない程繁つていた松、雑木、灰の林は灰で覆われた裸山になつてゐる。誤つて足を踏みこむと火の粉混りの熱い灰が脛を埋める。苦心の末本部壕に行つて見ると、中は暗く誰も居ないで、唯金庫が見えるだけである。外に出て附近を見渡すと食堂前の坂道に鉄兜の男が焼けずにいる。松尾学生主事らしい。又石段に頭を割られて死んでいる人も居る。まだ血が赤く生々しい。

本部壕の山に登つて病院の方を見ると、町も病院も唯黙々と燃える許りで実に静かで人の声一つ聞えない。時々爆音が聞える。二人で「オイ」と二声三声呼んでみた。すると病院の方から助けてくれと女の叫声が聞える。

穴弘法の下の上には日の丸の大旗がひるがえつてゐる。附近の負傷者にきくと、大学の本部だという。それに近づく為、一度堀割道路に降りた。そこには材木が積んであつて、その間には沢山の負傷者が倒れてゐる。近づくとき皆「水をくれ」といつて、うつろの目で、じつと見つめてゐるが「先生ですか」と力ない声でささやく。あゝこの見る影もないルンペン姿の男は、先程まで角帽の医学生であるらしい。もうこうなると涙も出ない。「水を飲んだら死んでしまふ、元氣を出しなさい、壕に行きなさい」と言い残して出発する。自分の素足には容赦なく釘がささる。止むを得ず死人の傍にぬぎ捨てられた破れズツクを拾つて片方だけはく釘だらけの垂木の角材を杖にした。大旗までは起伏の岡が続ぎ、その曲りくねつた細路には、うなだれた、血や埃りで物凄顔のほろ着の男女がダンテの地獄図のように点々と列をなしあてもなく歩いて行く。辺りの甘藷畑は葉も引きちぎられたり燃えたりして赤土の肌である。

旗に近づいて見ると火の海で近づけそうにもないのだが学生の救援は鎮火を待つことを許さない。残念だが引きかえそう。帰つて見ると学生の様子は一層深刻であるが手の出しようもない、そこで再び大旗に向つて救いを求める決心をした。今度は身体は疲れているが先刻よりも、時間が過ぎてゐるので大旗までようやく辿りついた。大旗を見ると永井隆助教授がテール掛に自分の血で描いた日の丸であつた。そこには調教授も居て思わず手を取り合つた。調教授は盛んに生藪を掘つて食つてゐる。少しくぼんだ処に永井レントゲン教室の誰彼が居る。永井さんは動脈を切つて相当疲れて横になつてゐる。「おゝ先生、生きていましたか」自分は四角な垂木の杖を投出して坐り込んだ。永井さんは暫く「サルマタ」一つの自分を見ていたが、「それではいけない、これをあげよう」と自分の黒ズボンを与えようとする。「それには及ばん、あんた困りましよう」と言つと、「いや一枚は持っている一枚はよい」と言つて脱いでくれた。それは腹のあたりに血が、べつとりとついた黒いズボンであつた。婦長は誰かのカッターシャツを貸してくれた。永井さんはこの先に角尾学長が寝て居られると言う。早速近寄つて薬学部のことや御真影の金庫のことを報告した。これで一使命は果たしたものゝ壕に残した学生の大問題が残つてゐる。永井さんに相談すると「何とも致し方がない」といふ。勿論附近に看護の人も居ない。こんな話をしてゐる間にも学生が氣になる。大急ぎで帰つて見ると、前にもまして手の施しようもない。それかといつて、じつとしてはいられない。そこで殆んど絶望とは思つたが三度救援を求めに行くことにした。大旗まで一キロもないが行く丈けで一時間はかかる。又富田君と二人で出掛けた。大分暗くなつた頃である。

行つて見ると先と大分様子が變つていて大旗は山の下の谷に移り、そこには藁も集められ、鉄兜で南瓜を水で煮ている者もいる。人数も相当増えている。永井さんに救援を求めると「まあ南瓜でも食べなさい」という。乾パンも貰つたが、殆んど咽喉を通らない。「そんなに疲れていてはいけない、暫く休みなさい」。もうこうなつては、もがいても仕方がない、言われるまゝに藁の上のところがつたが、次の瞬間壕のことが目に浮かぶ。前と變つて救援も出来そうに見えたので、永井さんに是非何とかして学生を救援して欲しいと言つた。それならと言うので少い救援隊の中から婦長始め三、四人の看護婦もつけて貰つた。飛び立つ思いで、とつぶり暮れたために烟を飛び降りたり吹ツ飛んだクロスの墓につまづいたりして山を降つた。

婦長さんは燃えさしのあかりを持つて暗い壕の中の学生にカンフルを注射して廻つた。又医者も一人来てくれたが殆んど皆絶望と言つた。これを聞くと張りつめた気も一時に弛み昼の疲れでねむくて仕方がない。学生の最後の手当をして、傷ついた学生、壕で助かつた学生と一緒に壕の中で寝ることにした。八月の上旬とはいえ夜の更けると共に寒くて仕方がない。裸体の者、シャツ一枚の者が踏板の上に抱き合つて寝るのである。壕の奥からはうめき声が遠く家の燃える音に混つて聞える。十二時を過ぎたと思われる頃負傷者の声も消えたが、自分の横の田中君が息切れたか冷い身体がさわる。

このようにして八月九日の夜は明けた。悲しいことに負傷者の大部分は死んでしまつたが各所から負傷者が集つて来る。今日は燃え残りの木材を集めて前の射的場に仮小屋を作ることにした。その中に生きている

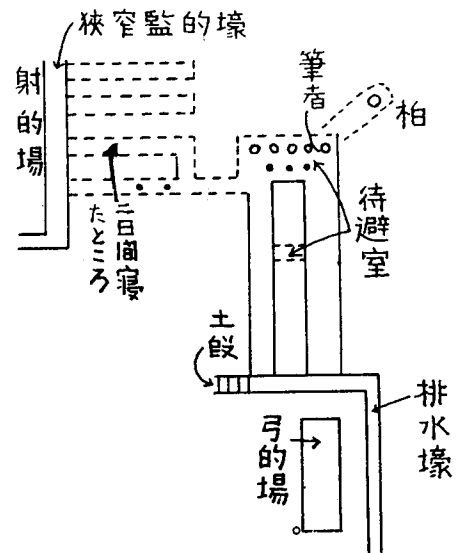
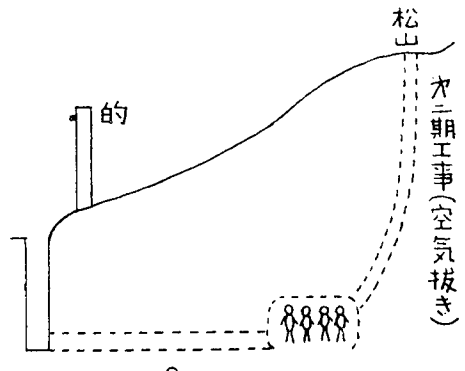
者を集め死体は矢場の砂の処に埋めた。負傷者の父兄も一、二駆け付けて死を見送つたり、モルモットの籠の焼けたものゝ上で死体を火葬する者もあつた。昨夜の寒さの経験で皆は被服を拾ひに出掛けた。山の手を見ると燃え残りの木に女物の晴着や帯が引ツかゝり、溝には男物といつた具合で、皆はそれらを見付け次第に身につけた。長い着物をそろそろさせている者、女物の広帯を身体に巻きつけている者、素ツ裸に緞の羽織を着ている者もある。そのうち山から永井さん一行が降りて来て手当てをしてくれた。敵機が来る度に壕に隠れた。何回かの待避のとき一人の学生が壕の前に立つた。低空飛行の敵機に見付かるとうるさいぞ、と叫んで良く見ると血眼になつた江口君であつた。講義中に被爆して九死に一生を得たと言つていた。この夜は永井さん一行と壕にねた。だが足を伸ばすことも寝がえりも出来なくて苦しい事限りない、それでも学校よりいくらか温かく過ごせた。唯夜雨が降つたのだらう。明くれば八月十一日、地方の消防組や各救援隊がぼつぼつ訪れてくる。又汽車も浦上爆心地附近まで通うようになつたらしく汽笛を聞く、その汽車で負傷者を運んでいるとも聞いた。そこで生存者を病院の燃え残りの処に運ぶことにした。尤もこの頃は殆んど薬科の学生は死亡し医科の人々が教人居る丈であつた。処が道がない、燃え残りの木材や乱れた電線の蜘蛛の巣の中を行くのに担架も充分にない、そこで仕方がないから大声でどなつた。「吾々はこゝを引上げる。諸君も連れて行き度いが今は運ぶ道具もない、已むを得ないが歩ける人は歩行して貰らい、動けない人は止つてよいが救援はいつ来るか今のところわからない」。すると今にも死にそうなる人が一歩々々列を作つて、小石につまづき倒れながら動き初めた、何と言

ふ痛ましい姿であろうか、これが永年苦楽を共にした誰、彼の別れの姿である。最も重傷の人々は急ごしらえの担架で運ぶことにしたが、中には数十分の生命しかない人もあつたので、姓名を尋ねたりしたが、それも待たずに死ぬ人も居た。壕の中や、薬品庫の書物整理中助かつた連中は傷ついた学友を病院の焼け跡に移つた本部に送つたり、死んで行つた者の仮埋葬をした。自分は板ぎれを拾つて炭で名を書きつけて墓標とした。又貯水タンクのセメント壁に炭で尋ねて来る人のため死者の名前を書き付けた。

これで一応仕事は終つたし学生は大変疲れているので、此の上引き留めていては又どんな事態が起るかわからないし、又家族の心配も察せられる。そこで全員集合して最後の君が代を合唱し、生残つた吾等には更に大きな天命があることを自覚しようとして語つて東方を揮つて別れた。それが終つた頃柏君が先生の荷物が薬品庫の地下室に焼け残つていますという、そう言われるとまだあの方に学生も居るのかも知れないと思つて行つて見ると荷は若干残つていたが学生は見当らない。それから薬草園に降りて見ると、誰か杉浦教授の死体があるという。馳けつけて見ると裸で温室の前で新聞記者と話していたらしく手を温室のレンガにはさまれて死んでいた。どうしても手を引き出せないで、そのまゝ記者とともにも土をかけて埋葬した。又学生の死体があつたが生残りは居なかつた。自分はこのから引きかえて先程負傷者を送つた病院に行つてみることにした。途中で川南高等造船の生徒が三、四人自分を見舞ひに来てくれて、何か手伝いたいと言うので薬品庫の荷物の小さいのを託した。病院には引率責任の学生も見当らず、薬専の負傷者がどこに居るかもわからない

程混雑していた。皆出来る丈けのことはしてあるがこれ以上は出来ないと言うし途中で倒れて居る人も居なかつたので、とにかく沢山の患者のどこかに居るものと思つた。ここで学生と高木教授を穴に見舞つた。仕方がないので、一度自分の家の焼け跡に廻り道しながら附近に残つている唯一の壕である坂本の壕に学生を探しても見えた。それから病院に引返して見ると永井さんがボイラ室の横で素焼の鉢を拾つている、そのわけを聞くと運動場の諸畑に行つていて被爆した看護婦や自宅でなくなつた奥さんの骨を入れるのだと答えた。こゝで永井さんの家族の一部の疎開地三山の再会を約して別れた。それは食物と休眠をとるためである。それから薬専の焼け跡を見ると子供二人と学生二人の黒焦げ死体があつた。自分の室の天秤台は引抜かれて何米か吹きやられていたし、永年使用の研究器具や材料はむざんに焼けていた。四方の山は赤く枯れ上り山火事が方々に見える荒涼たる運動場を望むと薬理の教授が寝巻姿で薬理の地下室から疎開品を出しかけていたが力尽きて杲然としているのが見えたので声を掛けたが近づくことも出来なかつた。

ついに失礼して三日三晩燃え続けた浦上の天主堂の下を通つて坂道を登りかけた。腹はへり咽喉は渇く、傍の井戸をのぞくと水はあるが釣瓶がない。残念そうに眺めていると軍服姿の人が「水ですか、水なら僕の所にあります」そこで水やら握飯を貰つた。それに味噌汁まで出されたときはまだこのようなのがこの世の中にあるものだろうかと思つた。礼を残してこの家を出ると、煙の中から全身負傷の女が現われ「稲佐に行きましょうか、私はそこに教人の子供を残していますが」と聞いた。恐らくこの人は道路の困難と疲れて到着は出来そうにもない。この頃か



日は暮れ、見えるものは方々の火の手で、古壁土の香いが死体の焼ける生臭い臭と混つたのが鼻をつく、黒焼の死体にも躓く、このようにして五〇歩、百歩と目的地に向つたが力尽きて、他家の濡縁で一夜を明かした次の朝、永井さんの仮寓についた。

今日は八月十二日学生の行方が気になるので下山していると途中で永井さん一行と出会つた、それで家に引き返し全員谷川で身体を洗つた。この部落は古い教会もあるキシタンの村であるが沢山の負傷者が流れこんでいるという、その中には学生も居ることだろう。全員治療の用意をして電燈もない古ぼけた家に充ちている負傷者の手当をして十二時頃まで方々を廻つたが学生は少かつた。

八月十三日も朝から治療、午後より町に下つた。町の入口に沢山の死体があるが多分重傷の家族が仮家を作ろうとして力尽きて死んだの

だろう、大小五六人が黒く焼けながら焼け材木を抱きしめているのが目をひく。又炎天下の死体は鼻をつく。これから町に出、学生を探してみることにした。坂本の壕では沢山の負傷者を昨日の手並で治療したり、病院へ連れて行つたりした。この日の夜はこの辺りの壕で一夜明かす。八月十四日、朝から治療をしたが焼けなかつた本町で学生を探すことにした。行つてみると何を

行に少しの金を出しに行つたが、銀行は大体的見当で心持良く支払つてくれた。だが学生は見当らない。このようにしているうち次第に身体は弱つてくる食欲は殆んどなくなつて来た。早く此の地を去らなければいけない。それには罹災証明書が必要である。人の話では井樋の口に市役所の出張所があるという、行つてみると附近の兵器廠の外人捕虜がはしやぎながら食事を取つていた。だが出張所では浜口町の人は城山小学校で事務を取つているという。仕方なしに爆心地下の川を通つて城山に向う。道は電柱、電線、木材の散乱で仲々歩行は思うようにならない。浜口町では沢山の死体のうちに腹から赤ん坊が飛出して胎盤が長く尾を引いていたし、松山局の近くでは老人を背負つた痛ましい焼け死体もあつた。踏切の処には特に沢山の死体がある。又城山橋から学校への川沿に黒焼けの者や沢山の水死人を引揚げていた。学校には諫早から応援



に來た巡査が忙がしそりに食料を配給して、証明書は山里校でやるという。

電車庫の焼け跡の横から山里に向いようやく証明書を得た。これから里郷を通つて病院前に入る道は壕の中こわれた塙の上になるところ死体のみである。病院では死に近づいている江口君と割合元氣な国房教授を見舞つた。自分は此の夜長崎をたち翌日徒歩で鳥栖、久留米に行き午後久留米で終戦を聞いて呆然とし疲れが一度に出て歩行も出来なかつた。

(当時 葉專教授 現在広島大学教授)

## 忘れ得ぬ日

富田恒夫

人間の理性は如何なる困難に面しても必ずそれを貫く道を見出すものです。

今の現実私の心を悲しませていますが、人間愛が人間の優れた理性を勇気づけ、必ずやすばらしい道を切り拓いてくれるでしょう。

——武谷三男 “暗い日” より

戦禍による社会の不安は人間の童心を劫かすものらしい。一時的にしろ、かゝる不安から脱れて自分のみの忘却の時間がほしい。これは当時の誰もが描いた夢であつた。

運命の調べは十たび来り去つた。思い出の地長崎のあの無残な空虚の中にも、十数万男女の犠牲を基にして静かな生活が流れているが、私は、この時、今一度、八月九日午前十一時二分前後の記録を忘れつゝある思い出の中からひき出して見たいと思う。

ふつと蚊帳の中で眼をさます。暗夜の空に今日も亦敵機の襲来。一つ、二つ……もはや教える氣力さえない。ラジオのブザーは夜となく、昼となく敵機の動静を伝えるが、国民の心の中には既に浮足たつた敗者のあきらめに似た姿があつた。時折の軍艦マーチは血ばしつた国民の悲愴な眼ざしに一抹の休息を与へはするが、最早や完全に民衆は疲弊の極に達したのである。

昭和十九年の暮、私は母校で級友八名と共に覚醒アミンの新合成の仕事を手伝わせてもらつていたし、他の友は学徒動員で山口県小野田の田辺製薬と大分県中津の武田化成に日夜徹宵の重労働をしていた。年は明け、戦局は愈々末路を辿りつゝあつたが、私は卒業が繰上げられ九月に学窓を離れることになつたので六月学生動員を解除され、一同間もなく元氣一杯で帰つて來た。暫らく学窓を離れている内に、既に自己本来の反省を忘れ、社会の悪染を汲みとつた同僚の姿ではあつたが、しかし尙、青年の若々しさ覇氣は失われてはいなかつた。当時騒然とした学舎も間もなく元の静かな真劍な学生の姿にかえり、少しでも多くの知識を吸収せんとするが如く、講義を受ける姿になつた。

江口部長以下の教授会は連日開かれ、講義を続行すべきか、図書、薬品の疎開を完了すべきかが討論され着々と実行に移されつゝあつた。一方、薬学の大防空壕は既に半年がかりで粒々として築かれていたのである。校庭に隣接した狭尺射撃場の溝から更に東南の丘を目がけて、刳抜かれ、当時、奥行十米、高さ一、五米の円形壕は入口を二つにして丘の中で会合する相当に頑強なものとなつていた。そして講義終了後、或は昼休み、研究の余閑に誰かしらスコップ、鍬、鶴嘴をにぎつては、岩に挑んでいた。清木先生は、何時でも、たゞ黙々として壕に向つておられるのだつた。あたかもブルト―ザーの如し、ひたすら壕の完成へと自ら範を示されていた。学内では、或は陰口をきく者、取員の中にすら罵詈する人も出たりしたが、生来の温厚な眼ざしに微笑さえ浮べ、あたかも来るべき惨事を予感したかの如く、それこそ真剣な労働を続けられていた。この間一度も、強要される如きことはなかつたが、同志は次々と集つて、互に生命の安全をこの壕に託するのだつた。

教授会の決議は遂に私共三年の講義を六月一杯で打切り、只管に壕の突貫作業を強行することになつた。その頃、学内は一、二年生の学徒動員で、全く淋しいものであつたし、私共、三年を除いては、僅かに病弱な学生が数名居残つている丈だつた。薬草園も私共が入学した頃は、実に美しい芝生と、薬草で学園に一つのオアシスを与えてくれたし、講義が終つた後や、独逸語で追い出された後等は、芝生に寝ころんで放談もし、笑いのたえない庭園だつたが、手入れもされず、雑草園の名、そのまゝになつて、それどころか、さつま芋で一面が芋畑になつていた。

浦上天主堂は薬草の葉陰から何時も美しい姿を見せていた。あの特異

な練瓦作りの塔からアンゼラスの鐘が鳴り私共に一種の慰めを与えてくれたりもしたが、戦局が急を上げるようになってからは一層憐れさを加えて行つた。天主堂を見おろす丘の一面には芋畑が山の頂まで敷かれていたが、丘を横ぎつて信者の白い葬列が日、一日と数を増していた。実に長い葬列であつたが、頭は白絹をかざし、口に聖書の一節を唱え、何時迄も続くのであつた。

西日が斜めに稻佐山にかゝると、紫色に染まつた山脈を通して陽光が夕暮の教会の十字架をキラツと黄金色に染めては消えた平和そのものの浦上。その姿は既に私共の中から消えて、長崎古来の風情も楽しむ余裕は殆んどなくなつていた。かゝる空虚の気持は、連日九時から午後四時半に亘る壕掘りの労働によつては、いさゝかも満たされはしなかつた。笑いを忘れた道化師のように、ただ汗にまみれ、泥によごれ黙々として働くのではあつたが、一刻も早く戦列につき度いという焦りを如何ともすることは出来なかつた。陸軍幹候や海軍予備学生として一人去り二人去つて、その送別会も空襲下のこととて個別に送り出さねばならず、街では何処でもやけくその祭りさわぎが行われていた。その間にも同僚の中から一人さぼり、二人休みして、総員四十九名の三年は、八月頃には三十数名になつていた。全国の各都市はその年頭から連日の空爆でも早や無傷の都市は五指を屈する程にしか残つていながつたが、長崎も最後まで空襲から逃れ得た都市の一つだつた。

初めて長崎が敵艦載機の襲撃を受けたのは八月一日だつたが、正午頃造船所への銃爆撃も一時鎮まつたので、私は末永と一緒に壕の裏山へ登つて見物していた。丁度その時突如として東の穴弘法の頂から超低B17

が七機音もなく病院目がけて滑り込んで来ると同時に黒いものをポロポロと落して去った。一瞬にして病院は火、煙の中にかくれ、私は草の上に頭からつつこんだ。初めて私は死の予感を体験した。「末永生きとるか」

「富田大丈夫か」二人は一目散に転ぶようにして森の中を壕へ逃げ帰った。「誰だつ。今頃、入つて来た奴は」杉浦さんの叱声。「ははん、富田と末永だな」秋山さんの声、「馬鹿野郎、皆の命も考えず、敵機襲来下に壕に入つて来る奴があるかつ、我々の居所が敵に知られたらどうするか」これは大きな頭巾を目深にかぶつた江口主事の声。病院では相当数の死傷者が出たが、この日を契機として学生は連日当番で宿直にあたることになった。蚊が多くてとても眠るわけに行かない。私は大実験室の長椅子によく寝たものだつた。この室は薬品の臭いで蚊が余り、寄りつかない為だつた。又大抵の者は教壇の上で寝ていたらしい。台が高いので、蚊に喰われる率も少いわけであつた。私はその頃、良く末永の家に往き来した。彼は実に器用であり分析が特に巧であつた。絵画にも相当趣味があり、その当時、余り有名でなかつた清水崑氏と親戚であつた為、私も一、二枚崑氏の漫画を戴いた事があつた。

八月八日、角尾学長は全学の職員、学生を運動場に集めて、広島の新型爆弾について医学的立場から実に適格な注意、処理法を教時間に亘つて述べ、今後、我々のなすべきことについて説かれたのであつたが、その惨状は殆んど想像もつかないものだつた。この学長訓辞を聞いたその夕刻、むし暑い長崎の夕風に、私は兄（当時熊本医大に進んでいたが暫らく帰省していた。）と末永の家に招かれていた。奈良崎、多田の両君と五人で酒を飲み、久振りに大騒ぎをしたのだつたが、十一時半別れぎわに

多田は「どうも明日頃、俺は死にそんな予感がしていかん。淋しいから俺を見捨てんで一緒に居てくれ」と長崎会館の玄関前で寝てしまった。私は兄と無理に起して終電に乗せたのであるが、翌日の運命は、私と兄を残して皆死んで行つたのである。

明けて九日は、朝から雲少く、幾らか乾いた夏空。常に交らぬ一日であつた。

昨夜の痛飲は今朝の気持を爽快にした。この日、私は何時になく身体の調子が良かったので、早目に起きて登校したら、未だ二名しか来ていなかった。常々なら定刻より十五分程遅れて作業に就いていたので、大抵は比較的楽な土運びだつたが、この日は、二列横体の右翼から三番目の後列に私は入つたのである。正九時荒木は何時もの如く、右翼から四名指名して鶴嘴をわたした。ところが、清水、杉浦両教授が「今日は一寸馬力をかけてやろう」と提言された為、私の列まで計六名は壕の中へ入つて行つた。私の他は、池田、奈良崎、田中、柏、椎名の五名であつた。私の左の列には山崎、江島が居たが、私の列を界として、その後、二時間目に生死を異にしたとは誰が想像し得たであらう。

「さあ、今日は大分つらい役目にあつたぞ」と内心うんざりし乍ら、鍬をとり策をとつて壕へ入つて行つた。皆一様に禪一つの裸であつた。九時二十分作業は始められ、清水、杉浦両先生が加わつて総勢八名となつた。池田、奈良崎、椎名、田中、私の順に約十五分づゝ交替で鶴嘴を振つた。私は鶴嘴を止めて壕の最も奥の板張りで囲んだ椅子で一服してゐる間に柏が鶴嘴を振つていた。裸電球をさげた所からもう先は大分曲つて柏の姿が見えなくなる程午前中の作業は進んでいた。この間、奈良

崎、田中は水を飲み、壕を出ていたし、杉浦先生は西日本新聞の記者の来訪を受けて葦草園の案内に出て留守だった。私は清木先生、池田、椎名と列んで休みながら互に雑談を交えていた。丁度十一時を針が指した頃、清木先生は突然「あの音、静かに」と叫んだ。幽かなB29の金属音がひびく。「誰か壕の外へ出て皆に木蔭で暫らく休むように言つて来なさい」と云われ、池田が飛び出して直ぐ戻つて来た。私は田中、奈良崎が早く帰ればいゝがと思い、皆声も出さず耳を欬ている時だった。急激な雷鳴と地鳴りと共に猛烈な激震が起つて、目も潰れるような尖光が頭の中を駆け巡り、ズズズと地底に引込まれ、地上に私はたゞきつつけられた。先生も学生もなかつた。生物も無生物もなかつた。先生の体にドツとぶちあたり、一間程飛ばされた。耳はガーンとして何も聞えず、呼吸は苦しく、数十秒の間何も憶えず、顔は呼吸苦しさにほてつて来た。

「壕の入口にB29が落ちたらしい。入口が塞がったぞ。俺達は生埋めに会つたぞ。」と目前の窒息死を感じとつた。先生は真先に気付かれたのか「おい、皆大丈夫か、傷はないか。鉞をとつて入口を掘り出さねばならぬ。ぐず／＼しては生埋めだ」と叫ぶ。池田、柏の兩名が真先に飛び出す。私はそろ／＼両手を頭から離れた。すると何処からか冷たい空気が流れて来るではないか。「先生我々は助かりました。何れかに出口は開いているにちがいありません。」正に歓声だ。入口とおぼしき方向をすかして見ると、段々と明るくなつてポツカリ入口は開いている。「あゝ助かつた」すると外から池田の声。「先生！外は大変です。皆のものは見わけがつかない。建物は何もありません。早く。早く。」何つ、何もないだと「先生は飛び出した。私も出ようとした時、入口から真黒い人

影が飛び込んで来た。「やられた。俺は残念だよ」私は両手ででき上げ顔を見た時、ぞつとした。これが人間否動物の顔だろうか。全身皮膚はぬるりとして血がにちみ、頭髮も眉毛も焼け落ち、顔面は焦げ爛れ、正しく埴輪の形相で、この世の姿と、どうして言えよう。「君は誰か」私は失礼とは思つても聞かざるを得なかつた。「松本登だ」あゝ、彼の美青年を今にして誰が想像し得よう。私は肩につかまらせて壕の奥へ横たえてやる。「俺は残念ぢや。B29一機から三個の色のついた落下傘を見た時、一寸普通の落下傘と様子がちがうがと思ひ、若しか広島に落ちたものぢやなからうかとつさに想像して壕の入口まで逃げたんぢやが、も一度見上げた時、アツと云う間にたゞきつつけられた。痛い。何とかしてくれ」意識は判つきりしていたが、興奮は非常なものだった。その間に、清木先生や椎名が、大火傷の友を壕へ運ぶ。私は壕の中へ順々に導いては横に寝させてやつたが、一人一人、名前を聞かねば見えかえがつかない状態であつた。「君は誰な」「池田(敏)だ。富田、わいは全然怪我ばしとらんね。おいの姿はどげんな。眼蓋が焼け着いて、眼がよう開かんが；」あゝ、何と云うことか。無傷の私を見なほした時、私は皆に相済まぬと思つた。一応、瞞しては見たが何の業にもならない。僚友が皆、両手を前に上げて手首からだだれた薄皮をだらりとさげたまま、火傷の苦痛を耐えしのんでいた。私の顔を見上げては、じつとして居れず、先生や椎名等と皆を励まし廻る丈だった。荒木は真正面からペニスをやられ、その苦悩の姿は見るに耐えない。宮本は既に内部の食道を犯されている如く、「富田、俺の下宿に行つて征露丸をとつて来てくれ」と泣き叫ぶ。約十二、三名の友を壕内に引き入れた。この間にも

壕の外では、十一名の僚友が池田、椎名の後をたどつて穴弘法の山肌さして登つて行つたと云うが、全身の苦痛と熱線傷のために、悉く中途にして悲惨な最後を遂げたと思われる。

爆発後十五分か二十分経つてであろうか、一陣の風は生温く吹き始めた。風は風を呼び、見る見る壕の外は火焰の坩堝となつた。一かゝえもある材木は風に乘つて飛来し、烈風と豪火は刻々と壕の周囲に近づいて来た。

椎名は「富田君、俺達はこのまゝ居ては蒸し焼きになる丈だ。逃げよう山へ」と避難をすゝめてくれたが、私は、この十数名の友を横に見てもどうしても逃げ出せなかつた。「俺の家は既に無いだろうし、孤独になつたから、こゝで死んでもいい」と壕の奥で坐つてしまつた。彼は一瞬、ためらつたが「では元気で」の一語と共に固く手を握り合つて、煙の中へ消えて行つた。彼が飛び出したと同時に壕は全く火焰につゞまれたのである。一丈もあろうと思われる大木が空中を飛び、三畳もあろうと思われるトタン板が紙片の如く舞い落ちた。くすぼつた木片が壕の入口を埋めて行き、熱風がこゝつと中へ巻き込んで来る。壕内は全くの煙になつて一尺先も判らなくなつた。私は禪をとつて泥水に浸ませて口を被う。傷つてる友の泣き叫び、むせぶ姿を見ても私と先生では何のほどこしが出来ようか。入口に埋る木材を壕の外へ投げ上げていた時、清水先生の背に焼けた大木が落ちて一瞬、先生は失神された。「もう僕は駄目だ。後の事は呉々も宜敷く。出来たら病院に応援を依頼して来なさい。私より、学生を。一人でも多く助け出す様に」先生は昏睡の状態にあつた。「先生眠つちや駄目です。皆をそのまゝ死なせる積りですか」私はゆす

ぶつた。だが先生は點頭く丈で声が出ない。一時は生けるもの只、一名になつたかと心配もしたが、間もなく蘇生されたので、先生を横に寝せてあげた。壕の奥から渡辺が、とぎれの声で「先生。人間なんて、なか／＼死なないものですね。死にきれんということはむつかしいですな」と声をしぼつて叫んだ瘦身の渡辺の身体から、どうして、斯かる美しい言葉が出たか不思議でならない。目を転ずれば田中は壕の入口で既に絶命していた。彼は野球の投手だつたが、手に確かと石を握つていた。恐らく、教秒の差で壕に戻るのが遅かつたと考えられる。村山は壕の入口でうつ伏せになり、地下水を口と鼻からすつていたが、既に意識はなかつた。米田と江島の両巨人は壕の一番奥の椅子に寝かせていたが、苦しいとも何とも云わなかつた。たゞ平穩な顔に苦痛を耐えているのが可愛想でならなかつた。

既に二時間の苦斗を経て一風吹き去り、焼き尽された跡には一物の生物なく、火焰に徐々に流れ去つた。先生を見るとズボンもはいて居られない。横に池田(敏)が猛烈な痙攣を起し出したので、自分のズボンを被せてやられたらしい。「富田君、時計がない。探してくれ」と先生が私を呼ばれた。この場になつて何で時計なんか未練があるのかと私は少々あきれもしたが、真赤な溜り水の下を探していると池田(敏)の身体の下から泥にまみれたロンジンの時計が出て来た。まだカチカチと動いていた。後から考えて、矢張り時計が出て来た御蔭で時の経過を知り得たのは貴重なことであつた。

「どうやら火も治まつたようだね。一刻も早く病院に報告せねばならぬが。さき程、柏君を伝令に出したのに帰つて来ないが途中で火にまき

込まれたんぢやなからうか。さあ出発しよう”と先生はフラフラ立ち上られた。私も先生も、さき程の猛火を防ぐ為、全身に泥を塗っていた為、お互に泥色の姿だ。

私は被爆後二時間もしてから初めて外の異変を見たのだつた。全く驚愕以上の恐しさを見たのである。山里、城山、松山の一望の廢墟の彼方に稲佐の山々は焦げていた。壕を包んでいた美しい森には一本の木蔭もなかつた。徑一尺もある大木の森だつたが悉く地上二尺の根本から雜倒され燃えつくしていた。太陽は舞い上つた塵芥の彼方に黒い車輪の如くかゝつていた。ゴーギヤンの絵のようだつた。清水先生は焼け残つた五尺の棒材を杖にして、たゞ落涙されるのみである。私はうしろから先生を押して歩く、土は灼けてじつと止まつて居れないのである。二人共裸足であつたので、ガラス、釘、につまづくこと限らない。

生化学の図書館が猛烈に火を噴き出していた。私の父が粒々として收めた数々の図書も、一冊一冊燃えては、ひらひらと舞い散つていた。火焰の中に、学部各教室も次から次へと落ちていつた。生化学の横を這い上り、本部へ下りて行つた。本部の横には歪んだ鉄カブトや女事務員の白靴が散乱し、当時の惨状を物語つていた。只、一人の生存者もなかつた。勿論本部の防空壕には御真影も入つていなかった。私等二人は病院を見おろして、第一、第二、第三病棟が火焰に包まれ、構内が瓦れきの山であるのを見た時、救援の望みを失つてしまつた。その頃の先生の姿は歪んだ鉄カブトを被り、一方の足には半焼けの地下たび、他方には底丈のズツク靴をつゝかけて居られた。私は丘の上の芋畑でちぎれた、デザートと片足の地下たびを拾つた。富田君、これではとても病院の者

は助かつていないよ。困つたね。誰に救援を頼むべきかな”先生の頭には壕に残して来た学生の頃のみ浮んで去らぬらしい。その時、土手の上から全裸の四十男が下りて来た。

”ああもしもし、大学病院の医者、看護婦を見ませんでしたか”  
先生は早速尋ねられた。

”あゝ病院の人でしたら、この畑を三つ越した向うの山腹に赤十字の旗を立てて避難していますよ。”あゝよかつた。どうも有難う”私等は助かつた。急いで土手の上からとぼとぼと山肌を穴弘法を左にして登つて行つた。芋畑の中腹に来て私は足がすくんでしまつた。幾千名という全裸の男女が身悶え、子供をかばい、既にこと切れた乳呑子とも知らずに無数のガラスの刺つた乳ぶさから飲ましている母親、夫を、親を友を呼び続ける狂乱の姿。寔にこの世のものとも思えなかつた。

彼方、此方には恐らく学生と思われる若者の今を境いとのたうち廻り、天に拳を振り上げそのまゝバツタリ倒れるもの。”水。水。”絶叫して息をのむ者数知れなかつた。私共が側を通ると”先生。水を下さい。私は大学の学生です。講義を聞いた事があります。外科に救援を求めて下さい。”腹からしぼり出す声は咳となり、のどに詰つて聞きとれない。

”よし。苦しいだろうが、暫らく待つていなさい。直ぐ呼んで来る”先生も私も、周囲から這い寄る数十の人々を前にして、このように答えて逃げねばならなかつた。我々の任務は壕に残して来た十三名の生命の上にあり。

やつと赤十字が判つきりと見えた。旗の下は黒山の人の群であつた。よく見ると血染の赤十字である。頭を相当に傷つけられた学生が一名、

雄々しく旗を保持していた。教授連の横たわつて居る中に、学長を見出し、清水先生は薬学部を報告をされた。学長は顔面蒼白、頭から血が流れていたが静かな姿だつた。私にも「御苦労さん。よく学生の面倒を頼む」と云われた。次で私共はレントゲン科の永井グループを見出した。さすがこの一団は永井先生を囲んで次々と指令を出されていた。

「永井さん。」「お、清水先生ですか。貴方も無事で何よりでしたなあ。」「固い握手をかわされた。」「いや。薬専の学生を壕に残している。私はどうでもいい。誰か助けて下さらんか。」手を合せて哀願された。見渡す所、元氣な教授も、助教授も居なかつた。私は疲労のため、草むらにぶつ倒れた。うつらうつらしていると、「富田君、眠っている時ぢやない。直ぐ戻らう。途中で山水を探すんだ。」私ははつとして飛び起きた。帰りは水丈を探して歩くが何処にもない。やつと見つけた谷間の水も幾百という死者の群で埋められていた。山肌の中途まで来た時、大学事務官の筒井氏に会つた。一升壕に大切な水を詰めて、つゝ立つていた。先生は事情を話され、氏の好意によつて、早速戴くことが出来たのである。私共は、これで級友に少しでも償いが出来ると感涙し乍ら、焦る心で壕に飛び帰つた。

壕の中は号泣、怒号の声。しかし既に呼吸絶えた友もあるらしく、声があつた。入口の既に死んでいた田中の口から順々に僅かの水を十三名の友の口へ注いでやつた。この愛すべき、正に呼吸を引きとらんとする友への最後の詞に、さゝやかな奉仕だつた。それでも水を口に含んで全く満足げに再び横になる友の笑顔ではあつた。更に多くの水を飲ませてやれたらと空虚な私の頭は、たゞそれ丈しか考えなかつた。その時、

清水先生は「今思い出したぞ。我々は何をしていたんだらう。この壕の横にはタンクがあつた筈だ。必ず水があるにちがいない」と洩された。その時まで、あの急激なショックで私共は全く忘れていたわけだつた。タンクへかけつけた。既に蓋は開けられ、学部の学生らしい二名の水死体が浮んでいたが、水は満々とたゞよつていた。私は躊躇する暇もなく側の鉄カブトで汲み上げ、壕の友へ、一人一人に心ゆくまで飲ませてやつた。天の与えてくれた唯一の慰めだつた。友は泣いた。狂喜した彼等は一呼吸に飲み乾した。大抵二杯の水を飲むのだつた。大火傷に水は禁ぜられているが、今の私に他に何が出来るよう。たゞ無上の歓喜と満足感を与え、安らかに死につかせるだけである。水に生死の境を求めた友は満足げに死んで行つた。生命力の旺盛な友は、母を呼び、兄弟を呼び、苦しみから身を避けようとするのだつた。

夕陽は斜にかゝり午後四時頃だつたらう。私と先生は再び医療班の旗の下へ走つた。如何にも医者と看護婦を呼んで来なければならぬ。出来得れば注射の一本でも打つてやり度いと一念だつた。清水、永井両先生の努力で外科の助教授一名と看護婦四名に同行して戴くことが出来た。壕への帰還はもどかしかつたが、それでも私は嬉しかつた。途中、芋畑で敵機の低空射撃に会い何度も畑に伏せねばならなかつた。「今度爆弾が落ちたら仕舞いだ。殺すなら殺せ」と覚悟をきめた事もあつた。壕に帰つた頃は既に暗く、壕内は明りが必要だつた。看護婦さんが紙片を束にして火をつけてくれた。実に親切な助教授と看護婦諸姉の取扱いで一人一人診断して下さつたが、既に半数以上の友は処置なしと断ぜられ、残りの者に一本づゝのピタカンフルを注射してもらつた。麻薬があ

る時ぢやなし、むしろ苦痛を増すと考えられたが、この場合私等に出来る最大の医療だつたのだ。被弾後既に五時間以上を冷土の中に横たえた十三名の友は皮膚から浸み通る地下水に震え出した。「寒い。寒い」と叫ぶ。私達は看護婦諸姉に手伝つてもらい、未だ元気でいる負傷者を壕の外へ出してやつた。松本（登）は「あゝ空気がうまい。気がすゝとする。この上に美しい水が、きれいな水があつたら他に何の望みもないがね」と満足げに言うのだつた。確かに壕の外は穏やかに風が吹いて、あの大火も今は穴弘法の上へ上へと這上つていた。私達は助教及び看護婦諸姉に厚く礼を述べ帰つてもらふ。夕陽が西に傾く頃、私達も寒くなつたので壕の中の方が温度変化も少く、風当りを防ぎ得ると考えたので、再び友を壕の中へ運び入れた。夕日は西に沈み、薄堇色の夕もやに閉ざれんとしていた。空は紅に変わり、赤褐色の灰を降らせていた。浦上の一きわ小高き丘には真紅の焰を挙げて燃える天主堂があつた。赤練瓦は大音響と共に散り、ギヤマンのガラスが火焰に映えてきらつと輝いては消えゆくのが淋しく望まれるのだつた。夜に入ると共に何らか連絡の便宜を計る上に、どうしても永井教室グループと合流する必要を感じ、三度山を登つていつた。血生臭い風で呼吸が止まりそうになりながらも暗い畑を通つて行くと、眼前に一人の婦人が立ちほだかつた。皮膚は焼けたゞれ、綿屑を一杯つけていた。「誰か医者を呼んで下さらんか」弱々しく頼まれた。先生と私は婦人に従いて或る石室に入つて見た。初めは血の臭いだつたが、目が闇になれて来ると、何十という白い眼玉が我々の方を凝視している。誰も声を出さない。それこれ、ぎつしりと幾十人かの男女が立つていたのだ。亡者の群とはこのような姿だろうかと膚に

寒をおぼえ、私共は黙つて外へ出た。外は又、風が吹きはじめ、風のあいまに、遠く、近く、親を子と呼び叫ぶ数万の声の木霊して、愈々悲惨な光景を呈していた。山の頂から風に乗つて来る母親らしい女の声。これ程、はつきりと肉親感をおぼえたこともなかつた。私はこの頃、既に家は失つたものと断念していた。母も兄も弟も亡きものと諦めていた。

「海ゆかば水浸くかばね……」の合唱が聞えて来た。先生は「恐らく永井グループの歌声にちがいない」と云われたが正しくそれだつた。私は「あゝやつと助かつた」と思った。

永井先生から乾パン一包をいたゞいた時は、泣ける程嬉しかつた。重本、松本（忠）両君は被爆の際薬品庫の地下に居つた筈だつた。或は助かつているかも知れず、若しかしたら火をたよつてこの辺に来ていられるかも知れないと清木先生はおつしやつた。私は彼方此方を大声で呼んで見た。どのくらいしてか、幽かな声で「清木先生——」と呼ぶ者がある。

「誰だ——」又、静かな闇になる。「重本です」あゝ彼は生きていたのだ。松本（忠）君は怪我をして倒れているとの事。私等は永井グループを混えて一応壕に帰ることになつた。

壕では既に静まりかえつていたが、私と先生は竝んで横になつたが寒くて眠れず、うとうとする丈だつた。夜明けが待遠しかつた。不思議に一匹の蚊すら飛んで来なかつた。長崎名物の夕風に飛んで来る蚊群も羽をたゞき落されたのだろうか。

明けて十日は、昨日の悪夢を忘れたかの如く、コバルト色に晴れ渡つた。私等は生存せる僅かの友を壕の外へ出してやつた。この朝、生存せる者、僅かに数名となつていた。米田、江島、村山、渡辺等は既に死に



絶えていた。未だ六時頃だった。遠くから「松本さん」「松本さん」と叫びながら泣き度いばかりの声で歩いて来られた夫婦があつた。松本登君の下宿の人だつたが、買物籠に握り飯や果物、生ナスビ、キウリ、ジャガイモを一杯詰めて恐らくこの新鮮な野菜を松本に喰わせるためにと親の如く駆けつけて来られたのだつた。今や生死の境を放浪う松本のうわ言を聞き、尙一心に看護に当られる姿を見て私は落涙をどうすることも出来なかつた。彼もこの下宿の夫妻に気がついたのか、笑顔を見せ感謝の手を握り合つた。十時半頃、「お母さん。お母さん。万才」と幽かに叫んで呼吸を引とつた。

この頃、最後の生存者は岡本省三君ただ一人だつた。彼は、何処かに死場所を探すべくとぼとぼと歩き廻つていた。恐らく両親を想い出し、最良の温かい場所を求めると共に。ふと私の傍へ寄つて来て「おい富田。俺が死んで行くまで傍に居つてくれ。こんなみじめな姿で犬死するのは全く淋しい……。あゝ一寸疲れた。横にさしてくれ」弱々しくさゝやいた。私は彼に着せてやる上衣類の無いのがはがゆかつた。友としての償いはたゞ心の結合だけだつた。私は左腕に彼の頭をのせ、少しでもやわらかな枕の代用にと彼を寝させた。彼も次第に疲労が増して来ている様子だつた。出来るだけ直射日光を受けぬよう私は身体で蔭を作つてやるより他に手段がなかつた。彼はじつとして居れなくなり、左に右に転々とした。やがて虫の知らせというか、「おい。富田。何処に居るや。眼がかすんで何も見えん。貴様の顔の形丈がかすかに見える丈ぢや。もう駄目らしいな。母や親父に会つて死にたいよ。母はきつと俺をさがしに来て呉れる筈だ。その時、若し会つたらこの時計を。……この時計を。……

……渡してくれ。……ああ」そのまゝ首が動かなくなつた。眼は開いたまゝ虚空に両親を探し求める如く、顔には笑顔さえ浮べて、遂に十二時四十五分哀しく息を引取つたのだつた。共に學びつゝ勞働に励んだ友の最後の一人を失つてしまつた今、私には何の興感もなかつた。余りにも青年の命の短かく散つて行つた姿を見て、青春の何たるかを疑わざるを得なかつた。

夕刻には久米師団から軍隊の出動があり、負傷者の收容がはじまつた。その頃、私等の壕は大学内で一番堅固を誇つていたので、生き残りの大学々部の学生が数十人、一様な惨な姿で壕の周囲に転々としていた。兵隊がやつて来て重傷者を大病院本館まで運ぶようにと伝えて来た。私は比較的元氣な学生の肩をかつぎ、打ち折られた大樹、電柱、全壊した病棟のコンクリートの山を越えて一人、二人と運んでは戻つて来た。正に重労働だつたが、私は飯も喰い度なかつた。握り飯を見ると吐気をもよおすのだつた。兵隊は私の姿を見て驚嘆して、一人の将校は賞めてもくれた。私は江口主事の令息(学部二年)を運び終えた後、そつと病院の薬局に入つて見たが、薬は何もなく、灰の山だつた。二階から三階への階段には、五、六体の焼死体が当時の惨状そのままに、或は抱き合い、或は手すりに寄りかゝつて仆れていた。頭をさわると、ぼろぼろと灰になつて散つた。全く男女の区別さえつかないのであつた。

その晩、私は壕が寒いので病院本館入口の、死体の灰の上で寝た。適度の温りがあつて、当時としては別天地の寝床だつた。明けて三日目の十一日は、朝から市民が病院本部につめかけ数千名を数えるようになって、身動き出来なくなつたので、幾らか冷えて来た本

館建物の中に重傷者が整理されて行つた。私の同僚で当日運よく休んでいた友が続々とかけつけて呉れた。中でも態々熊本から本田君が帰つて来てくれたのには感謝した。皆は当時の惨状を茫然として私から聞く丈だった。私は病院本部との連絡をやつていた時、期せずして病院食堂の前で弟に会い、家の様子も大凡判つたし、母も無事だと聞いていたので気持は大分落付いていた。同僚の手をかりて、私と清木先生は壕の中から亡き友の亡骸を運び出している時、私の兄は穴弘法を山越えして私をさがし廻つていた。壕に辿りついて私が生きていることを知つた時には、さすがの兄もぼろぼろと涙を流し泣いていた。

皆で壕の外に友の亡骸を埋葬し、私は木片に炭で各人の名前を記し位牌の代用にしてその上に建てた。かくして、一応は皆の埋葬を終えたので、清木先生は、「こゝで解散しよう」と提案された。一同、亡き友の前に整列し、先生の指揮で最後の別れを告げ、茲に私は三日目に家路をさして帰つたのであつた。新大工町に橋本の下宿していた洗濯屋さんがあり、私の家とも懇意だつたので寄つて見たが、橋本は帰つていなかった。壕の土運びをしていたので、恐らく同志十一名と山を越えて逃げ行くべく辿つて行つたのであらうが、途中で動けなくなつたのではないかと私は伝えて置いた。

家では母が私を見て卒倒したりしたが、二、三日寝ていてもあとの整理が氣になつて、再び十五日頃から大学へ出て行つた。八月下旬になると全国から遺族がかけつけられ、私は毎日、同僚の御家族を案内して共に骨を集めたのだつたが、壕の十三名は兎も角として、行方の知れない十一名の家族の方々には何としても氣の毒で慰めの言葉を知らなかつたのである。

## 原爆体験記

寺戸 寿 雄

今を去る十年前の回想であるから時間的には多少の記憶のズレがあるかも知れないことをお断りしておきます。

原爆投下に先だつこと旬日(？)、長崎市は敵機の空襲を受け附属病院の一角に被爆し、患者、看護婦等数名の犠牲者を出した。この状況に鑑み、当射的場の小山を利用して防空壕が作つてあつた。その壕は一且地表から地下に掘り下げて地下室の作り方であつた。この壕の奥行が浅かつた為にもう少し深くする為の作業を医学、薬学交代でやつていたわけであつた。丁度被爆前日即ち八月八日より引き続き作業をしていたのが当時薬専の三年生であつた我々である。

壕の中は狭く多人数入れないので大体四―五名が中に入つて掘進していた。私は前日迄掘つた土の運搬係りの方をやつていたが、当日は交代しようというので私は希望して他の友人数名(池田、椎名、田中、富田柏?の各君)と壕中に入つた。

交代したことが後で思えば運命の岐れ路にならうとは神のみ知ることであつたのでありましよう。

暑い最中ではあり皆上半身は裸体であつた。時は丁度空襲警報が解除になり警戒警報になつていたので医学、医専の人々は授業を受けていたところが又直に爆音が聞えたが何大したことはないだろうとタカを喰つていた。

その時である、壕の最も奥の方にいた私の感じはピカツと閃光を感じ、ドカンという二大音響を聞き、それと同時に壕の中に引き込んであつた電燈は消え、猛烈な爆風を受けた一隣耳がガン／＼して何も聞えず目も勿論見えな。しまつたグテツキリこれは壕の入口辺りに爆弾が落ちて壕が塞がり生き埋めになつた。もう駄目だ！という死の直感が頭に閃めいた。その時は後で分つたことだが午前十一時二分であつた。

この時のこの気持は戦場に於ける死に直面した兵士の場合も同様であろうと思ひ何とも形容し難いものである。そうした場面に遭遇した言葉の表現は文学者にお委せしましょう。

暫くすると壕内の薄煙もはれてきて友人も元氣にしているのを見て何となくホツとした気持ちになる。何とかして穴を出ないことにはと相談してツルハシ、スコップ等を握りしめた。ところが何か知ら先の方が薄明るのでオヤ穴は塞がつてないぞ。シメタ。呼んでみようとしてオーイと呼んでみたところ外の方でも応答があつた。

急いで出口にかけつけてみると穴は異常ない。先程の感情とは反対にヤレ／＼助かつたぞ、よかつた／＼と喜び合い乍ら外に出てみて驚いた。外で待つていた学友は、即死者はいなかつたようだが、放射熱と爆風の為である。黒く焼け焦げた皮膚、その皮膚が厚くむけて下の赤味がまる出しであり、乞食がボロ／＼の布をブラ下げたように、立つて歩く様は、まるで俊寛僧ではないがオドロを身に纏いさまよい歩くが如しで何とも無残此の上もなく、正視するに耐えない有様である。

空には未だ爆音が聞え、猶危険を感じずるし、負傷者を先づ壕内に收容した。殆んどの者は自分で歩いて入る位の体力はあつたように思う。負

傷者はひどい火傷のため湯を訴え、口々に水をくれと叫べども水は無く、動ける者が自ら壕内の泥水を飲む有様、又ひどく悪寒があるのである。今度は寒い／＼何か着る物をくれと叫べども我々も同様裸ではあるし、手の下しようがない。

外の光景はどうかというに倒れた木造校舎は、倒れると同時に放射熱で燃えだし、その熱風が風向が変るとドツと壕内に吹き込み、たまつたものではない。その度に壕内をあつちこつちと逃げ廻る始末であつた。

火勢も漸次衰えて周囲の様子を眺めてみると又々驚きの外ない。一望千里ではないが、目にうつる所一面の焼野原、校舎は勿論一般民家も樹木も焼けたゞれ浅ましい限りである。竹林は全部が地面にベツタリはいつくばつたように寝てしまつてゐるし、浦上天主堂のあの威容も現在残つてゐるような見ればかげもない有様である。

壕内に寝ている寒い／＼という負傷者のために焼け残りや、風に吹き散らされたボロ布を集めてくる。それを少しづつ分け与えるがホンの気休めでしかない。

病院の方は鉄筋コンクリートだから大丈夫だろうとは思つても、天主堂があつた通りだからとても駄目かも知れない。病院自体が被害を受け、各自も医業学を学ぶ者であるが一旦被害者の立場になると何と情ないことか、医学が病院が我々の身から遠く離れて行くのをどうすることも出来ない。之を思うに医学は治療に第三者的立場で初めてその機能を十分に發揮できるものであることをつく／＼感ぜられた。

その間にも壕内で負傷者を励げました乍ら一緒にいたが、何せ手の施しようがない。その中あちらで『天皇陛下万歳』と最期の言葉を発する者

があり、こちらで『お母さん助けて』と弱々しい声を出す者もあり、ウメキ声も次第／＼に高くなり死の陰が漸く皆を押し包みつゝあつたのであります。この頃は大体午後三時―四時位だつたかと記憶します。被爆後四―五時間経過していた。

同じく壕の中で作業していた田中君は、どこをやられたのか外見上には見るべき傷もなかつたようであつたがひどく弱つていたようだつた。後ではこの田中君も死亡者の一人となつていた。

何しろ生存者よりも負傷者の方が多く、それに手当はされず、全く弱りぬいてしまつたが、今度は気持ちの上にも時間の経過と共に少しゆとりが出来て来たので我々生き残りの者が急に空腹を覚え、このまゝでは徒らに皆を死に至らしめるだけだから、山を越えて脱出し、救護所に応援を求めようと思見が纏まつたので富田君一人又は二人であつたか判然としないが、残つてもらい鼻の芋など掘つて食べ乍ら金刀比羅山に登り出した。

ところが登り始めてからが又大変だ。学友のうち壕に收容し切れなかつた者は自分で山に脱出口を求めて登つたものもあり、行方不明の者も沢山いたし、患者、看護婦、一般の人々等数え切れぬ人々が登り口辺りの山の中腹に至るところゴロ／＼と転り、中には大きな包を背負つた中年の女性が立ち上ろうとするそのまゝの姿勢で、中には子供をしつかり抱いたまゝ倒れている若い母親、虚空をつかんで憤怒の形相すさまじい男、こういつた者は何れも即死者か被爆後短時間の間に死亡した人々である。我々数名は裸であるが身にかすり傷一つ受けていないので、我々を見ると助けてくれ、水をくれと哀願する者数を知らず、いつそのこと我々

も同様に被害を受けていた方がどれだけ気が楽で、實際身の置きどころのない有様とはこんな場合をいうのではないかと思つた。まさに此の世の生地獄、地獄の責もかくばかり、戦場でも多分こんな凄惨な光景は見られないかも知れない。

又登り出した山の光景がすさまじい。小さい樹木は云うに及ばず、周囲二尺も四尺もあるような大きな松の木が地上三―四尺位のところからヘシ折られて、登る道もない様に折り重なつてゐる。実にその威力や恐ろしい限りである。道なき道をかき分けて行けども行けども数限りなく人がたおれている。大方登りつめた頃学友の松野君を発見、倒れているのを助け起し肩をかし乍ら頂上に辿りついた。

そこから眼下に見下せば浦上、道の尾方面の工場地帯は黒煙、白煙を吐き乍ら燃えており、長崎駅方面も煙が望見せられ、山上より眺めた様は又凄惨さが一層深く感ぜられ、土地の起伏が見えるだけで燃え易いものは皆燃えてしまつて何も無い。あちこちポツ／＼と燃え残りがつゝ立つてゐるだけである。山の上には木にとまつていた蟬がボタリと落ちてひっくり返つて手足を動かしミン／＼鳴いてゐる。

動物も昆虫も原爆の威力の前には問題でない。併し畑の茄子などは倒れもせず実をつけてゐる。松野君が渴を訴えるのでその茄子を取つて与える、しかし大して渴を医す手段にはならなかつたようだ。

その中にも負傷者で歩行の出来る人々、動員学徒、婦女子あらゆる者が皆御承知のように全く二目とは見られないような格好でドン／＼上つて来る。

こゝで他の学友とは家路の方角が異なるので別れ、松野君は下宿先が

私と同じ方向だったので彼を助け乍ら途中何回も休み／＼やつとのことで下宿に辿りついた。早速下宿の家の人々と応急処置をして彼の看護を依頼して我が家に待っている母が心配になり、急いで帰つてみた。不幸松野君も不帰の客となつたのであつた。

私の家は相当に被害を受け隣近所ではその程度が一番大きかつた。尤も家が大いせいいで風当りが強かつた為かも知れない。様相は哀れを止めているが、母も隣人と待避壕に避難し、微傷だに受けず全く無事であつた。何という奇蹟／＼母子とも無事であつたことを神に感謝せずにはおれない。私の家は金比羅山の被爆地の反対の側にあり直線距離にすれば三千米位はあるかも知れない。長崎の場合山が高かつたお蔭で被害も案外少なかつたようだ。

防空壕も家の中に掘つたり地表に横穴をあけた位のものは何にもならない。一旦深く掘り下げて地下道を作つたものなら勿論長く深く抜け口も用意したものなら私の体験上、或程度難を避け得られるようだ。今考えると体の工合が悪く、我々のように壕掘りが出来ず学校の薬品庫の地下室で書類等の整理をしていた学友松本忠、重本、川浪、竹田の各君も無事であつたように思う。

翌日生き残りの我々が連れだつて又山越しに学校へ行つてみたが、山に倒れていた負傷者は殆んど十一十五時間位の間に全員死亡しており、夏の太陽に照りつけられて哀れを一入深くすると共に敵国に対し限りなき憤りを感じた。よしこの仇はきつとうつてやるぞと深く心に期し乍ら……。

学校へ行つてはみたものゝ、元気な者は大分登校していたが、なすべ

き手段は何もない。直に解散して遠方より来ていた者は各自郷里に引き揚げた。我々も卒業を九月に控えてのことだつたが、卒業式までは生存者は自宅に引き揚げてその日を待った。

死亡者の取扱、負傷者の応援に各地より馳せ参じた肉身やその他の多数の人々の中には、被災地に来たばかりに原子病に斃れた人も多いと聞く中に、我は爆心地で生き残り、被災地にも出入し、負傷者の手助けをしたことにも不拘、それらしい症状は出なかつた、之も不幸中の幸かと思つていたが、何日頃かはつきり記憶しないが、下痢が始まつた。当時の症状としてはそうした人も多かつたので、これはてつきりやられたと顧念して市内病院で診察を受けたが一週間位したら次第に下痢が止つた。その後何ら異常がないので之なら大丈夫だろうと思つた。又々こゝで命拾ひしたわけだつた。母は私と違つて全然異状は認められないようだ。

終戦後一―二ヶ月間は非常に雨の多い天気が続き、私の家も雨洩りはひどく、傾斜もひどく、修理するには大変だし、思案にくれていた。幸い唐津市に住む親戚に事情を話したところ、こちらに出て来たらよからうとのことで世話になることにして、多年住み馴れた長崎を後にして唐津市に転居した。時は昭和二十年十月十日頃である。その後現在地に住んでいるが別に体の具合は何ともない。

この分なら大丈夫だろうと思ひ、昭和二十七年十二月結婚し、翌年十一月一女をもうけたが子供には何ら異状は認められなかつたようだ。被爆者の子には奇形児が出来るとか、男の場合は生殖能力がなくなるとか、女の場合は不妊症になるとか色々聞いていたのでそれを恐れていたが、幸にその心配はなかつたようだつた。

併し乍らごく最近になつて(三十年五月頃より)いさゝか貧血気味で、軽いメマイを覚えマスチゲンB<sup>12</sup>錠など服用していたら気持の上から少しは良いようだが完全ではない。十二指腸虫もいないようだが。

原子病の特徴である白血球数の減少、骨髄炎等の恐るべき前徴ではないかと疑い、又肝臓の辺りが何か知らシク／＼痛みを感じ、腹が変に圧迫を感じたりするようになったので、私は煙草は全然喫まないし、酒も少ししか飲まないが、肝硬変、潰瘍、肉腫、癌と勝手な自己判断をして今のところグルクロン酸、メチオニン製剤等服用しているが、之もハッキリした効果は見られない。何処か一寸異状を感じると直ぐ悪い方に原子病と結びつけて考えたがるので気持が落ちつかない。現在のところ食欲はある。

広島の被災者の中に十年を経過した今日でもなお犠牲者が出ていることを新聞等に報道されているし、四、五年前生き残りの奈良県出身の学友竹田君が胃腸疾患で死亡されているのであれこれと思ひ合せて、今度自分の番かなと取り越し苦労をする次第である。

原子病が表面に出ず内臓機能を侵すので猶心配である。一度原子病に關しては権威ある母校の教授先生方に総合的な診断をしていただけたら納得が行くのではないかと思ひ、こゝに勝手なお願ひをしたわけでありませう。

以上とりとめなく思ひ出づるまゝに書き立てましたが、この拙文が何かの参考になりましたら幸甚に存じます。

若き命を散らした多数の学友の冥福を祈りつゝ……。

## 村山君の事ども

村 松 正 俊

其の朝は快晴であつた。私は賀茂海軍衛生学校の学生として、調剤実習室の前の広場に同僚と共に整列し、「課業始め」の合図を待つて居た。此の学校は海軍の名とはおよそ縁の遠い広島県の山中に建てられ、我が長葉からも私の他松尾、松原、高取、奥野、寺田、の諸君が入校して生活を共にしていた。突然右背後から光圧を受けた。光圧と云う言葉があるか否かは置くとして、私はそう感じたのである。例えるなら写真のフラッシュを間近に受けた感じであつた。皆一齊に振り返つたが、その方向には朝の夏空が青々としていただけで、とぼけた雷のいたずらかと氣にも掛けなかつた。「おいあれは何だ」一人の指示す方に再び振り向いた眼に飛込んだのは、何時出来たか巨大な薄桃色の南瓜の様な雲であつた。青空にもく／＼と脹れ乍ら昇つて行く、其が何であるか皆の意見はまち／＼であつたが、やがて地に伝つて来た響によつて何かの爆発であろう、と云う事だけは一致した。此れが広島が受けた人類最初の原爆である事が分つたのは、夕方近い頃であつた。「広島が一瞬にして無くなつたさうだ」「死骸がごろ／＼しているさうだ」「兎に角想像出来ない惨状だ」などの話で、冷静沈着であるべき海軍士官の卵が、その夜消燈後も興奮して寝就かれなかつたのを覚えている。

その頃、長崎では勤労働員先の小野田で袂を別つた級友達が、最後の学業仕上げの為、母校に帰つていた。それも半分は防空壕掘りに時間

を喰われていた由、八月九日も快晴で彼等は朝から防空壕掘りに精を出していた。横穴式の防空壕であつたので後に数名の生存者を得たのはせめてもの幸であつた。壕は奥がせまいので教班に分れて交替で壕を掘つていた。

理数の清木先生が一番奥で土を掘り、富田君外数名がその土の運搬に當つていた。富田君がザルに土を盛り外の方へ数歩進んだ時、彼の身体は後へ突飛ばされ清木先生の上に折重つて倒れた。"どうした"。清木先生の大喝、(理数の時間この一喝にはよく参らされたものである。)何が何やら分らず土煙の中を這出して見ると、此れは又夕暮の様な薄暗さの中で潰れた校舎の屋根は既に火を噴いていた。

其処ここに今迄一緒に作業していた級友達が倒れている。岡本君は腹が裂けて既に事切れており、村山君は"水、水"と云いながら喘いでいた。竹田君と松本君はその日身体の具合が悪く地階にある図書室の整理の方を受持つていた。竹田君はものすごい重圧を感じたとたん本棚がガラ／＼と倒れ伏す中でやつと身一つを守り得たが、モウ／＼たる埃で見当が付かずしばし茫然としていたが、松本君が元氣なのに力を得、天井の一角に破れ目のあるのを見つけそこからどうにか拔出して九死に一生を得た。その竹田君も数年後に郷里の奈良で亡くなつたのを知つた。

村山直行君は名筈順が私の直ぐ後なので何をするにもよく一緒にあつたし、郷里が共に福岡県であるのも親しみを増した。家では一人息子で坊ちやん育ちのせいとか我儘なところもあつたが其の一面人なつてくくて良く行動を共にした。彼は文学が好きで読むだけでなく大作を書くのだと大いに力んでいたものだ。何でも千姫を主題にしたもので書き上げたら

読ましてやると云つていたが遂にその機会は得られなかつた。勤労働員で田辺製菓の小野田工場に行つていた時も同室であつた。私が海軍薬剤見習尉官に応募し福岡に受験に行つた時、なれぬ町ではあり、終戦間近の時で旅館が少なく、あちこちで断られ途方にくれた事があつた。ふと彼が丁度帰省中である事を思い出し呼び出したが、彼の小野田へ帰える時間が迫つており、二人で博多の町を走り廻つてやつと旅館を見付け出した事もあつた。又私が衛生学校へ入校の際形見を呉れとの事、その頃あまり大びらには読めなかつたアメリカの小説本を見付け出し、此れが良いとその裏表紙に、"海軍薬剤少尉村松正俊、之を村山大兄に贈る"と遮二無二書かされたのには参つてしまつた。かくしてその頃銃前銃後の区別は殆どなかつたとは云え一応死を覚悟して軍籍に身を置いた我々がそのために原爆の災厄をまぬがれて生き延びているのを見ると人の運命の不可思議をつく／＼と感じるのである。願わくば若くして散つた友の御魂よ、再びあの惨劇を地上に見ざる様世界の人々を導き給え。

あとがき

今度の御企画、誠に結構と思ひ無才をかえり見ず拙文を草した次第ですが、何分小生長崎の原爆は体験しておりませず生き残つた友人達からその時の有様を聞いて記憶致しておる次第です、しかし折角記録を残す以上は一寸した事でも、同じ事でも多くの人からの投稿を得て編集された方がと、小生の記憶の誤りをも恐れつつ書きました。若し事実と反している様な処がありましたらよろしく御処分下さいませ様御願ひ致します。

(昭和二十年卒)

村松

## 原爆の体験

柏 司

十年前の事を回想してみると、ある場面だけが妙に生々しく甦つて来るが、その前後は霧に包まれてもした様にボンヤリして了つてゐる。

昭和二十年八月九日午前十一時頃、私は壕の一番奥で鶴嘴をふるつてゐた。と言うより、ついさつき休憩で水を飲み、奈良崎君と二人で出て、一緒に咽喉をうるおした後、彼は教室の方へ行き、私は引返し、今まで掘つていた田中君と交替したばかりであつた。鶴嘴をとつて一打ちか二打ちかしたとき、「オヤツ、静かに!!」と清水先生が大声をあげられたので、手を止め、耳を澄した。圧しつけるような金属性の爆音を立てて、急降下するらしい飛行機の音、どうも日本のと違うようだなと思つてゐるうちに目も眩むような閃光が幾曲りもした壕の最奥である筈の私の目を射た。「アツ」と二秒位の間を置いて、左の耳の上から平手打を喰つたようなシヨツクとともに裸電球がパーンンンと尾を引く様な音をたて、爆け飛んだ。キーンンンと耳鳴りがするが、そのときは殆んど、それは意識の表面には浮び上らなかつた。忽ち闇黒に包まれて、第一に思つたのは、壕の入口近くに爆弾が落ちたに違いない。生理めになつたのと違ふかしら。手に鶴嘴があると心強く握りしめて未だしばらく呆然とツツ立つたまゝであつた。暫くして池田君が「オーイ、入口は開いてるぞ!!」。この声を聞いたとき、しめた助かつたと思つた。そろ／＼と湿つた粘土質の壁を手探りしながら、入口の方へオズ／＼と足で地を擦

るようにして進んだ。誰かの掌に触れた。思わず確かり握り合つて黙つて入口へ進む。入口からボーツと薄暗い妙に赤茶けた又は毒々しい黄色の光が射して来る。壁土か又は乾いた粘土が爆風に捲上げられて、霧のように立込めて視野が効かない。それと真暗な所から出て来た戸惑いとで、壕から出て暫くは眼をパチ／＼していた。段々四囲の状況が判つて来るにつれて驚愕に打ちのめされそうになる。徑三十一—四十センチの雑木が繁つていた山が、たゞ赤茶けた粘土質の丘となり、刑務所みたいだね、と評していた高いコンクリート壁は飛ばされて、見馴れない風景が直に向うの山陵へと続いている。樹木、家、電柱そういつたものが滅茶苦茶に倒れている。二抱えもある椎の倒れ木に妨げられながら菓専の教室の方へと視線を向ける。土煙りとも火煙りともつかぬ煙につままれて、ペシャンコに、まるでマツチ箱を押しつぶしたように、たわいなく我が校舎が潰れて見える。

ふと目を足下にやると、目も鼻も土ほこりに厚くまぶされて、泥人形のようななつた級友達が、両足を投げ出し、両手をついて上半身を支えるような姿勢で踞つている。余りに激しい変貌に、之がさつきまで冗談を言い合つていた級友なのだろうかと思つた。居られなかつた。最初に口をきいたのは江島君だつた。「やられた。落下傘の爆弾だ。痛い」。ぼん／＼と言う。「しつかりしろ、大丈夫だ」と口だけでも力附ける。「ウン」と一つうなずいてみせて、後は痛むのか黙つて了う。仰木君、渡辺君等は割と元気な声で話し掛ける。何を話しかけられたのか、今は全く思い出せないが、兎に角、意識の確りしている点で大分心強く思つたのでした。壕へ負傷者を運び入れ始めた。腕をかかえて、抱き起



そうするとズルリと焼け爛れた上膊部の皮膚が剥げる。「痛い」と思わず手を放して呆然と級友を見下して、つツ立つ。杉浦先生は菓草園の方だったと思い着いて、そちらへ行うとしたが、余りにも無残な倒壊物の障壁に思い直して壕の方へ引返さず。壕の裏手の講堂の方から真ツ赤な焰と黒煙が迫ってくる。

医大薬局長谷さんのお嬢さんが血まみれで髪をふり乱し、煙の向側から駈登つて来、いきなり清水先生にすがりついて泣き出す。先生はよしよしとか何とか、子供をなだめるように背中を撫でて居られたが、後をふり向き「誰か病院に行くものはないか」と叫ばれた。一番無傷なのは、多分自分だろうと自認していた私は早速、連絡をとるため、病院へ向つた。講堂のあの不絶の道は火で、とても通れなかつたので、銃器庫の上手あたりから、畑を横切り、グビロ墓のある丘の方へと大迂廻して病院の横手へ出た。すでに病院は煙でかすみ、血に染んだ看護婦や学生の姿が二三見受けられた。車寄せの方から上つて行くくと丁度頭に繻帯を巻いた永井先生（或は翌々日のときと混同しているかも知れぬ）を見受け、薬専の方も怪我人が多いので、誰か寄してくれるように頼んで、直ぐ引返した。来る途中、三センチ位の板についた釘で踏み抜きしたのが鈍く痛む。大きく迂廻しながら学校の方へと倒壊物を避けながら丘と丘との谷間へ出た。そこで一生懸命になつて柱を持ち上げようとしていた十四五位の男の子が、私の姿を見るなり血相を変えて、飛んで来て、腕をぐつと掴み早口で何か、わめき散らし、ぐいぐいひっぱりながら、倒れた家の方を指す。半白の老農婦が柱の下敷きになつて、あえいでいる。その少年と二人でウン／＼と柱を持ち上げようとしたが重くて、とても上

らない。仕方がないので、瓦や、その他を一つづつ取除けて行き、やつと柱の下から、その婦人を引出すことが出来た。

私は婦人を出すや否や駈け出すようにして薬専の方へと歩いた。この当りは余り歩いたこともなく裸足のため用心しながら倒壊物を避けて歩いたためか、仲々学校へ帰えれない。やつとの思いで校舎のある附近に来たときは、濃い煙とメラ／＼と赤い焰に包まれて、全く近寄ることは出来ず、否それどころか火はだん／＼と括まり、煙が目にしみて来る。清水先生や皆はどうしたのだろうか、気に掛かるが、どうしてよいのか判らず、ウロ／＼火の廻りを歩いてきた。そのうち、よろめきながら三々五々と山の上へ向つて歩いて行く人達に気付いた。そうだ愚図々々していたら自分も火に包まれて了うかも知れない。この人達のように山へ逃げよう。

一先ず下宿のある片淵へ山を越して行つてみよう。そう決心して歩き出した。そうして自分の身を眺める余裕が出来てみると、作業中のことだったので半ズボンだけで裸足、裸というのは、どうも具合が悪い。キヨロ／＼見ながら歩いて行き、草履半足とお婆さんのものらしいしチャンチャンコと杖とを拾つて段々痛みが強くなつて来た右足を労りながら山道を登つて行つた。

途中二年の吉田君が真ツ赤に血走つた目で、一升瓶を抱えて道端に坐り込んで休息しているのを見掛け、声をかけたが、返事もせず、ヂツと宙を見詰めていた。

一抱えもありそうな木が地上三十センチ位から吹き飛ばされているのを見乍ら、多分新型爆弾だろうと脅威を感じながら、とほ／＼歩いた。農

家のおかみさんらしい頑強な身体付きの人達が四五人手と手をつなぎ合つてワァーンと、まるで子供のように、大声を上げて泣きながら、血を滴らせて歩いてゐる。その後から三人の男女の子供達が余りの恐怖に泣くことを忘れたように黙り込んで随つてゐる。その叢、この道端にと血にまみれた人達の苦しそうな、うめき声、時々「水、水」と弱々しい声を出している。むつとする血の生臭さゝに包まれながら、私は心のうちで「畜生くく」と念仏のように繰返して歩いてゐた。山の上へ登れば登るほど、その惨禍の煙と火とが広く視野に入り、余りのことに地獄図絵を見るように呆然と立ち止まつたことが屢々だつた。

頂上近くには高射砲隊の横穴壕があつて、自からも繃帯をした兵士達が、次々に登つて来る負傷者の中、重症の者だけを收容し、色々と手当してゐた。「水、水」と求める。私もヒリヒリと焼けつくような渴きを覚えた。勿論余分の水のある筈もなく、とほく山を越して行つた。私も間もなく市街の見える筈の道を曲りながら、必死になつて神に祈つた。どうか下宿の方は無事でありませうにと、何度も心の神に祈つた、また一方、それはとても虫の良すぎる注文だと失望を余り大きくさせないように自分の心を叱つた。

そして山の向う側で初めて青々と茂つた芋畑と木々と、その間にチラ／＼見える屋根を見たときは、嬉しくて／＼そこに坐り込んで動けなくなつた。

すぐそばに夏大根の畑があつた。夢中で駆け寄り、一本グツと引抜いて泥を拭うのも、もどかしく、ガリ／＼咬んだ。泥でジャリ／＼すると生大根を三分の二位も嚙つたのは、生れて初めてであり、多分最後のこ

とと思う。

休息していると、白鉢巻の女子挺身隊らしい女学生等が二三人無言で通り過ぎて行つた。

夏シャツが縫目の生地になった部分を残して無くなり、真白な肌が露出し、漆黒の髪からポトリ／＼と血を滴たらせて、無表情に通り過ぎて行く。真昼の幽霊を見たように戦慄が走る。何と無残な美しさだろう。

下宿に帰つてみたら、天井は破れ、部屋に掛けていた衣服その他爆風に飛ばされ、窓枠も撓ぎとられて了つてゐる。暫く休憩した後富田、寺戸、松野三君の自宅又は下宿をそれぞれ訪ねた。富田君は学校へ行つたまま、寺戸君は欠席してゐて無事、松野君は逃げ帰つた由。今度は食糧を持つて、山越えして学校に帰ることにした。市役所附近まで燃え上つた猛火に不気味に夜空が明るい。遠くて又近くで「何々やーい」「お父さーん」等と呼び交し、呼び求める声が、胸に喰入るように聞えて来る。真暗な山道を学校の方へと出掛けたが、気が転倒しているせいか、道を迷つて、さつぱり何処に居るのか判らなくなつた。そのうち踏抜きにした足が腫れ上り、うずいて歩けなくなつて来た。そして下宿に引返して来たときは、朝も近くなつてゐた。

翌日は足が痛くて、まるつきり動けなくなつてゐた。

十一日（或は十二日）再度諏訪神社の裏山から、学校へ出掛けた。下り道で、木の根にすがりついた姿勢のままで死んでいる少年を見た。パツチリ眼を見開いたまま。暑い日から照りつけられ、すでに腐臭を漂わせてゐる。

壕にたどりついて、清木先生、富田君、重本君、富田達夫君等と逢つた。そして壕に残つた負傷者達は一人残らず死んで了つたと聞いた。そして色々富田君から話を聞いた。

(二十年卒)

## 原子禍

天野敏夫

昭和二十年八月九日、南の国異郷の国と唄われた長崎が、世紀の武器原子爆弾によつて一瞬にして灰燼に帰し、皮肉にも頬笑みかけた三つの花。桃色の落下傘瞬時にして屠る都市と人命、生きとし生けるものの総ての生命を奪い去り長崎七万の市民の霊は炎と共に昇天し、放射雨と共に大地に浸透し去つた。峻烈なる放射線の中に奇蹟的にも立尽した私達の運命と遭遇。今は亡き恩師と級友の雄々しき姿も其の花の散りて跡なく、露の消えてはかなく、想ひ出は今此処に懐しき声聞く心地すれど、思えば更に思ひ乱れて逝く水の更に還らぬ現世の習とも夢か現か十年の歲月流れ行く夜空の星の空しくも夢の過去となり過ぎんとしている。川のせせらぎ返す日の光に夏は今年も交らねども真夏の太陽は再び當時を想起させる。

紙白の僅少なるを憂えつゝも拙文を弄し世界恒久平和を祈りつゝ今は亡き学友の霊前に捧ぐ。(私の想出「原子禍」より抜萃)

クローバーの草息の中に真夏の太陽はまぶしい程照り映え、立つてい

る身体に焼けつく暑さをじつと我慢して大詔奉戴式に参列していた。十二時四十五分より角尾学長の訓辞になり新型爆弾について語られた。二度東京出張の帰途広島にて列車不通となり歩いて次の駅まで行く際大きなリュックを背負っていたが市中には生々しい死体が無数に転がり爆弾の破片もなく落ちた大きな穴もなく谷底の一軒屋まで被爆されるといふ実に不思議な爆弾でありこの様では我々は一時でも緊張をゆるめてはいけないといふ話であつた。

教室に帰つてからは学友間に其の話で一ぱいであつた。既に広島から長崎へ逃げ帰つた人々もあり直ちに被害の状況は大体に於いて知れた。臼井君が昨日村山君に遭つたら村山君が博多からの帰途、列車で被害者と一緒に乗りその状況のすべてを話して呉れたと語つてゐた。教室内は喧々ごうごうとして広島の話に尽ていた。神だに知る由なき時の運の来るや来ずや若き学徒のさよめぎの中に誰か明日の運命を予期した者があろうか。明けて九日学校内では万全を期して清木先生の指揮により完全待避の出来る壕の作業が此処数日前から行われ講義は全然中止であつた。その日私達病弱組(動員にて身体を損した者)は薬品庫の中に疎開した書籍の整理中であつた。顔触れは私、臼井君、川浪君、岩本、竹田、山田、松本(忠)の諸君であつた。これはすべて杉浦先生の指導で行われた。学友の大半は荒木君の指揮で二手に分かれて壕掘作業をやつていた。時十一時を過ぎたと思われる頃急降下音を聞いた。また敵機が来たと言ふ打をした、とそれと前後して一大音響と共に物凄い爆風と熱を感じた。瞬間的に伏せたが時既に遅かつた。外へ出ようと言う声に頭を上げたが全然視野がきかなかつた。暗中模索の気持で這い上つた。真ツ暗な中に

物凄く黄塵が立ち登り本校舎と思はれる地点に青紫色の焰がちよろ／＼と燃えさかっていた。あたりを見廻わしたが眼に止る範囲に立っているものとは何一つなかつた。人の流れがあちこちより起り始めた。何処へ行くとなく半ば皆失神状態で唯人の流れに自己の意識を失つて歩いて歩いた。ふと我に返つた時は運動場に出た。あたりは盛んに燃え始め砂煙を混ぜた風さえ起り始め、身の置き処とてない有様で松本(忠)君と共にグビロが丘に避難した。人影は次第になくなりいづこともなく去り一帯は自然と燃え盛かる市中のみであつた。上空の雲は白、黒、赤、黄、紫と色とり／＼の色調になつて行つた。一人雨にたゞかれて我にかえり教会の下を流れる河に降りた。曇の上に高木医専部長が横たわつていた。夕方五時過ぎ頃であつたであろう校舎の跡に行き学友と連絡を取る予定であつたが今朝まで元気の学友は半ば死体となり壕中に横たわつていた。荒木君はまだ意識があつた。仮本部が穴弘法の下に設けられてあると聞いて救援隊を組織する積りで火の中を歩いて行つた。清木先生と連絡がとれて其の後全学友の救護にあたり六日間を壕内で過し亡き学友を射的場に安置し、その凶面は江口部長に渡し時津、長与方面に行方不明者を探しに行つた。

(二十年卒)

## 原子雲を仰いで

広 島 至 誠

原爆十周年記念事業としてその記録を出版すると云うので私に書けと云われましたけれども原爆を直接体験しない私故と一応御辞退はしたのですが、長崎を離れて居た私達がどうして原爆を知りそしてその被害をどの程度に想像していたかを述べるのも意義ある事と教えられて筆を執りました。

なお本文の資料は当時長崎在住の同級生のメモ及びその記憶によるものであります。

戦火も益々熾烈になつた昭和廿年六月の或日、旧薬学専門部第二学年生の我々は集合していました。そして其の時、熊本県第七〇四二工場(現熊本県水俣市新日本窒素水俣工場)への学徒動員令が申し渡され、同時にその場で学校戦時研究動員として

郡家淑郎、田中幸三郎、田村時男、一番ヶ瀬忠政、安本、吉田一馬、吉田功、岡部利成、中岡秀男、伊丹陽、平湯司、中川原、福田一男、青木、大谷義郎

の諸君が決定したのでした。

その日は共に手をとり合つて喜ぶものあり羨やむものもありて悲喜交々でありましたが、それが彼等にとつては死への宣告であり、五十五日の後この幾人かが永遠の別れにならうとは誰が想像し得たであろう。

六月廿日午後五時、水俣駅前に集合した我々三十八名はそれより祖国

の必勝を信じ連日の作業に若人の情熱を傾けたのであります。

然しその反面窓窓の下に咲く宵待草を眺めて郷愁に駆られたものでした。

我々と初めから起居を共にされた主任の杉浦先生は、

「君等の生活をよく長崎の友へ伝える。君等も最後まで頑張つてくれ」との言葉を残して帰崎されたのも此の花の咲く頃でありましたが、この言葉は我々に残された先生の最後のものとなつたのであります。

その後空襲が益々苛酷になるにつれて吾々の意気は更に高まつて行きました。

八月七日の襲撃には二名の学友が負傷し、その血を見て「こゝは前線に直結しているのだぞ、我々の死は戦死と何の代りがあるか」と憤り合つたものです。之も我々が動員されている工場が火薬原料工場であつたからで、この点で長崎より危険だと考えていたからであります。

こういう話があります。

学園に残る親友が休暇をとつて帰郷したある学友に長崎駅頭で別れる時、

「どちらが先にたおれるだろうか」

「それは工場にいる俺さ、死んだら後を頼むぞ」

「よし、引受けた」

と言つたそうです。

之は研究室に残る友もまた我々と同じ考えを持つていたことを裏づけるものであります。

「広島に新型爆弾が投下されたそうだ」の報道を耳にしても工場の復

旧や崩潰した寮の片付けや、其処に埋もれた身廻り品の掘出しに寧日無き有様であつたので、山の彼方の出来事としか感じられませんでした。

昭和廿年八月九日午前十一時二分

空襲に会つて待避していた我々は突如遠雷の如き音を聞きました。

何ごとかと振り向くと天草の上にかゝる雲を突き破つて有明海の尽くるところに龍の様な一條の白雲が真直に／＼昇つて行くではありませんか。やがて雲はその頭をひろげたが雲の脚は途中よりブツツリ切れた。とみる間にそれは急速に昇つて一つの塊りとなり、真青な大空を赤に青に將又黄に緑に彩り、さながら夢に見ている虹の様に、真昼の太陽に輝きながら我々の頭上を横切つて行きました。

あゝこの美しい虹の下で地獄絵巻が繰り抜かれていたとは……。

やがて空襲がとかれ、三々五々と集つて来た我々の話題はこの異状な雲でありました。そして誰かは「雲仙の噴火だ」と云い、或者は「日本の新型空雷の実験さ」と言い会つたものでした。

ところが何処かで待避していた学友が最後にもどつて来て「長崎市民は全員待避せよ」「全員消火に勤めよ」と放送された事を云つたのです。之を聴いた長崎出身の我々は喫驚し興奮しました。

更に這入つた情報は「長崎四里四方総て人なし」でした。

「デマだ、我々の工場だつて全滅的打撃を受けているぞ。だのに我々はこうしてピンピンしてるじやないか」

「たつた一発の爆弾で人類が亡びてたまるもんか」

当時の我々には想像も出来ないことであり、又想像したとしてもそれは現実の長崎の姿の万分の一呑億分の一にも過ぎないことでした。でも

国家存亡の機に吾々が戦っているのだと思うと無事である筈の恩師を、級友を、家族を、一瞬でもいゝこの目で見たいという願望も断ち切らざるを得ませんでした。

来る日も来る日も長崎の安否を気遣いながらの作業に工場長も我々の心情を察して呉れたのかやがて特別休暇を与えて下さることにになりました。

然したゞみかけて終戦の詔書が降されたので動員解除となり工場を離れることになつたのであります。

若き情熱の限りを傾けつくした戦も終り虚脱した我々は涙と共に「海行かば」を齊唱して水俣の海と別れました。

日がすでに不知火の海に没し、島々の影が夕靄の中にうすれてゆく頃、甲板で我々は何を想い何を考えたことでしょうか。

明くれば十六日、早朝十八名の友を三池港に残し、我々十九名が島原の湯江に上陸したのは九時を少し過ぎていました。

そこで我々は悲惨な長崎の片鱗を見せられたのです。片腕は焼けただれ膿さえあふれ出ている一少年の姿。

彼は何処へ行こうとしているのか。

ただ一刻も早く長崎から離れたい一心で斯くして来たのです。

彼から聞き得た長崎の実状はたゞ「廢墟」「慘澹」でありました。

それだけで我々が満足出来るはずがない。

土地の人、車中の人をとわず長崎の情報をわずかでも知つた人があれば誰かれの容赦なく聞き糺そうとしました。

然し結論は話より事実が大きいということでした。

我々は色いろと長崎の実状を想像して見ました。でもそれは思い半ばに過ぎるものでした。いよゝ汽車が道の尾を過ぎると我々はじつとして居れず車窓から身を乗り出して車外を凝視いたしました。

あゝ何と悲惨だ。

何と残忍だ。

之があの緑の美しい長崎か、万目茶褐色ではないか。工場の鉄骨は餓の様にひん曲り、へし折れている。

灰燼の中にポツンととり残されたあの痛々しい姿が大学附属病院か。母校は見えない。消えて仕舞っているではないか。

恩師は、学友達は……

骨を拾う人か、それとも一かけらの家財を求める人だろうか。点々と蟻の様である。

あゝ、之が夢にえがいたあの長崎の姿だつたのです。

線路の側に眠っている白いお骨を揺り起さぬためか列車は静かに浦上、長崎へと進みました。

(二十二年卒)

## 同郷の亡き学友を偲ぶ

奥野正治

十年一昔とはよく云つたものだ。あの悲惨極まる原爆が長崎に投下されて一瞬にして戦下悪環境裡に苦楽を共に分ち合つた級友の半ばを失つ

てより早や十年、誠に口惜しく悲しいことで、私の脳裡から去り得ない事の一つである。就中我が山口県より共に笈を負つて長崎に学んだ松本登、岡本省三両君の爆死を耳にした時、両君の生前より交友を厚くしていた私は非常な衝撃をうけた。思えば昭和十八年薬学を志し、単身未知の長崎へ行った私には不安と頼りなさで一杯だったが不図も両君をはじめ、同県先輩、同僚に会い、その好遇を得て不安も吹飛び、勉学にいそしむことが出来た。両君と私の下宿先もそれ／＼余り遠くなかつたので、実習を終えて帰ると集つて漫談の花が咲き、松本の弾くギターに併せて歌を口吟み夜の更けるを覚えぬことも屢々、両君のユーモラスで円満な人格に接し、迎える日々が楽しく有意義な連続であつた。二年生の秋戦争の激化と共に、学徒動員が行われ、岡本君と私達は小野田市田辺製薬工場に働くことになり、松本君は研究室に残ることゝとなつて、共に語り、共に笑う機会を失つたことは返す／＼も残念だつた。小野田へ行くに当り松本君が私の下宿まで来て、荷物の取まとめ、駅までの運搬に加勢して呉れ、互に今後を励し合つた時のことは未だに感激の極だ。又岡本君とは田辺工場に於て共に働き寮では同室に起居を共にし戦時中の物心両面に於ける窮乏を分ち互に激励し合つて来たが、昭和二十年四月私は海軍衛生学校へ入学することになり、遂に訣別の日が来た。今も尙小野田駅頭で日の丸の旗を打振つて送つてくれた岡本君の姿が瞭然と思出される。二年有余の学生生活は亦松本、岡本両君との年月でもあつた。その年月を顧みれば、恰も走馬燈の如く色々のことが思い出され、一片の紙上に記すことは全く不可能なことだ。両君の冥福を祈りつゝ筆を擱く。学友故松本登、岡本省三君安らかに眠り給え。(二十一年卒)

## 内野輝子さん

歟 先 佐 和  
(旧姓 植木)

内野輝子さんと共に仕事した時の回想

私共二人は学徒動員の際、当時講師をしていられた横山(葉専)先生の御世話により先生の仕事を動員の形で科学研究補助員として奉仕することになりました。二人とも科学にあこがれて胸をおどらせてあの緑の小路を通り一番奥の薬理教室の左端の研究室に通いました。仕事はくわしいことは今覚えていませんが、先生が考えられた薬品の合成、精密な測定等で一日中立ち通しの中にも真剣な楽しい研究が続けられました。特に輝子さんは好學心強く学窓にあるときと同じく追求して止まざる姿がそこに見られました。研究室には二人の外に薬専の生徒二人、製薬所から一人位で私共のような部外者でも御手伝いした位でした。先生の研究されたものは常に寺坂先生と連絡があり動物実験に回されました。その頃薬理学教室も先生方の出征にともない手不足となり、私は薬専の方から薬理の方にせきをうつし動物(カナリヤ、にはとり)実験の方の御手伝いとなつた輝子さんは毎日先生の御指導の許で合成、融点測定、ミクロ天秤と取りくみ時には色素の方の研究の御手伝いもしていられました。四月でしたか、私は家庭の事情で仕事を一応止めましたのでその後の様子はよくわかりませんが手不足の中で薬にまみれ汗を流して仕事に精進していられた姿、今なお私の眼に浮びます。輝子さんの御冥福を御祈りしながら筆をおきます。時間が許されればと思ひながら――。

## 我が子を追憶して

郡 家 政 治

歳年の流れは早いものにて、あの原爆の悲惨事があつて満十年と云うものが夢の様に過ぎました。

本年は我国は勿論各国の人々からも原爆の被害やら利用につき諸種の方面から特に論議せられ、其の異常な結果が将来に於て全人類の生命及文化等に及ぼす影響につき考究せらるゝ事と存じますが、私等原爆の直接被害を蒙つた者に取つては、殊に痛切なる思い出やら感想が雲の如く湧出する次第です。

此度当大学でも十周年記念事業をなさるゝ趣きにて何か感想を書く様にとのお薦めにて取るに足らぬ私等如きものにも、又斯様なものもありと云う事を若し余白でもありましたら末端にでも御記載を頂いたら幸甚かと存じます。

私は大体に於て無神経と申しましようか無頓着と申しましようか、戦争中は空襲に対し弾が直接自分の頭上に落下すると云う様な事は千万中に一つも無い物だと云う様な気持から、千万に一つもない事に心を悩ますよりはと思つて防空壕も自宅には造らず、避難もせずには過してしました。然るに原爆死に逢つた子供の淑郎は或る日に一度び自分はこんど防空員とかに指定せられたから、いつ何時空襲にやられるか知れぬから覚悟を決めていると父の私に洩した事がありました。

原爆の前日八日は偶然にも電車の中で子供と一緒に乗り合わせ子供は

学校へ、私は長崎駅から大村の関係工場に立寄り、唐津の某酒造家に泊りまして、九日昼食を致していますとラヂオで長崎に空襲があり全市民待避すとの知らせが、大した事も無いものと存じまして、翌十日は福岡大学農学部の子博士を訪ねました。農場に行かれて留守中との事にてお目にかゝれませんでした。途中長崎の元商工会議所の理事長鈴木苞教さんに逢いましたが、広島原爆の被害甚大なる事を承りましたが、長崎の被害について話されませんでした。それから福岡県の城島に出で、清力酒醸場の中村氏宅に一泊、翌朝長崎に帰ろうと存じましたら、久留米の空襲で電車が通わず、午後遅くなつて電車が通ずる様になつて鹿島迄終列車で留まり、翌十二日道の尾迄汽車にて出で長崎に入つて被害の異状なのに驚いた次第です。

十三日、十四日は薬専の実験室やらグビロが丘などを何か形でも残つていないかと思つて、次男の徳郎と死骸を捜しましたが何物も得ませんでした。図書館の焼跡で般若心経を唱えました。途中中学校で淑郎が特に御世話に預つた横山先生にお逢したのは何よりでした。

就きましては私としては亡き子供の事を追悼しますと万感胸に迫るものですから、子供の事を思い出す様な際は、其の菩提を弔ふ意味で直ちに般若心経や金剛経を誦唱する事と致しています。而して子供は死んだのではなく眠つているのだと思ひ過しています。

左の様な拙歌を作つて心を慰めています。

原爆の落ちし其の時如何ばかり

我子淑郎は驚き覚めけん

原爆に覚めし我子の魂は



如何なる花の姿と咲くらん

古きもの皆亡び行き新なる

高天が原の岩戸開をや

天地の開けし初めの古を

古事記を讀みて想う此頃

私は古事記や金剛經を讀む時何時も子供は死んだのでは無く、私等の心に思い浮んだ時子供等は常に甦生しているものと信じています。

子供が死んだと思つて悲嘆し痛恨するよりは、子供を追善し原爆の思ひ出を積極的な方面に活用しましたら、子供等は精神的に生きているのだと信じ得られるかと存じます。

原爆時代の犠牲になつたものとさえ思ひ度ありません。

地に因つて倒れた者、地に因つて起ると申します。原爆に因つて倒れた者は原爆に因つて起きねばならぬと存じます。一瞬にして空虚に帰した長崎医大からは被害が深刻であつただけ其の被害地被害者を中心として新なる世界観、新なる文化の發生地として復活する事を望みたいと思ひます。

私は仏教は死の道を教え、日本の古事記は生の道を教えるものと存じます。

仏教に般若を体して法華に入ると云う言葉がありますが、般若空の智慧にて法華經の諸法実相の世界を觀ると云う事です。法華經の諸法実相と云う觀方は古事記の生々主義と余り異ならぬものと存じます。

此の法華經第廿三に藥王菩薩本品と云うに喜見菩薩が日月溪明徳如来に我れ神力を以て仏に供養せんよりは愛する身を捨てて仏に供養する

に如かずと云つて、身に油を灌いで焼き此の菩薩が藥王菩薩に甦生する事になつています。此の原爆に焼尽した医大藥專が恰度喜見菩薩であり疎王院菩薩と存じます。今後長崎医大及藥專が如何なる姿で世界に出現すべきか。法華經の第十六無量壽品には仏の生命が久遠なる事を詳説せられていきます。最近放射能に依り生命は時空を越える事が実証せらるゝ時節となりました。

就きましては原爆の中心地として長崎医大に永久生命研究と云ふが如き形のを世界學術の先端を行くものとして他に率先して、設置を企てられる様な事にでもなれば、私等如き直接被害を蒙つた者にも非常な意義を感じられ、愉悦を覚えらるゝに非ずやと思ふ次第です。洵に唐突な意向を申述べました次第ですが平素法華經の從地湧出品や無量壽品を誦誦、藥王菩薩の捨身焼尽の意義に成る真理に感じつゝある者に取りましては、此度の原爆との間に何となしに神秘的な關係が医大との間に潜在する様に存じますので愚考を申述べた次第です。

或は藥王菩薩を記念碑みた様なもので表徴して頂いたらと存じます。追つて医大及藥專に多少關係あるかと思はるゝものに梁塵秘抄と云う書に讚歌として

壽量品ノ部に

法華經八卷は一部なり、廿八品其の中にあのよまれ給ふ説かれ給ふ壽量品ばかりあはれに尊きものはなし。

仏は香山淨土にて淨土もかへず身もかへず始も遠く終りなし、されども皆是れ法華なり。

沙羅林に立つ煙、上ると見しは空目なり釈迦は常にましまして雲鷲山

にて法を説く

薬王品

身を変へ二たび生れ来て仏の滅後に参りあい、二つの臂を燃してぞ、多くの国をば照らしてし。

法を求めししるしには臂を燃して仕へつゝ、我が身の髓脳砕きてぞ菩薩の位えたりける。

娑婆に不思議の薬あり、法華経なりとぞ説きたまふ不老不死の薬王は聞く人普く賜ふなり。

死亡者名簿(付属薬学専門部)

教授	山下次郎	杉浦孝
事務	岩本偵吉	横瀬久吉
	山本利吉	井手篤子
	内野輝子	松尾滝子
(イ) 三年生	荒木一夫	池田敏明
	江島修	仰木英雄
	小曾根邦弘	陶山桂
	田中博	多田哲雄
	橋本慶治	藤田豊弘
	松本登	宮本保彦
	矢富智久	山崎武
	米田量平	渡辺寿
(ロ) 二年生	青木茂樹	一番ヶ瀬忠政
	田村時男	平湯司
	安本道男	吉田功
(ハ) 一年生	竹本典國	中尾滋
	中倉光雄	中川原哲夫
		郡家淑郎
		福田登
		吉田一馬
		山田庸夫
		村山直行
		松野義輝
		奈良崎一城
		末永孝幸
		岡本省三
		石田憲敬

## 達一の思い出

土 肥 ト ラ

八月一日の長崎空襲の時も医大をやられ爆弾が落ちると防空壕にすべり込むのと一緒で帽子と眼鏡を飛ばされたそうです。その後から来た人は爆風のため飛ばされ壁に打つけられペシャンコになり即死だったそうです。空襲はだんだんひどくなるので是非父母の疎開地西彼三重村へ行く様、幾度か進めたのですが卒業も後一週間、大丈夫と云つて別れたのでした。

八月九日午前十一時二分原子爆弾落下私は（達一の姉）浦上と背中合せの立山に住い、ピカツとしたので床下の防空壕へ入ろうとすると家の建具が部屋にとび、ガラスの破片で数ヶ所の傷を負い、顎下の一纏五耗角のガラスを取り出し、幾度も幾度もマキユロにて消毎し、近所に遊んでいた四才と二才の子供を捜しに行きましたら、幸いピカツとしたので庭の防空壕に入れられ無事で安心致しました。

さて医大の弟はどうしているでしょう、心配でなりません浦上方面の空は皆既蝕の時の様な暗さで何だか匂がひどく息苦しい様でした。

夕方頃より浦上方面にでて負傷した人がぞろ／＼下つて来ました。着物は血だらけでポロボロに破れ、またやけどのため顔や体が赤く腫れた人ばかりだが、医大の生徒らしい人は一人も見えませんが、私は何時迄も立ち続けやつと二三人の葉専の生徒さんに尋ねますと心配はないでしょ

うと申されましたので、すこし安心しどこかでお世話になつて居るのだらうと思ひ、何時来るかと待ち続けましたがとう／＼帰らず、夜中に雨が降り又心配で／＼なりません。小さい子供がいるので探しに行く事も出来ず、たゞ弟の無事を祈るばかりでした。

原爆落下三日目の朝時津に疎開していた兄と、三重に疎開した姉とが達一死体を捜出したと知らせに来ました。私は流れ出る涙をおさえ空襲もひどいので死体を運ぶ事も出来ず、その場所へ埋める事にしました。穴弘法の上の山よりすこし上つた道ばたの一段高い一坪ばかりの草原に横たわり、左上の手、肩より少し下の方に医療器具が飛んで来たのか大きな貫通傷を負い、前頭部にも十厘位の傷があり何れもよく繃帯がされ、止血法もしてありましたが出血多量にて倒れたのでしよう。恰度その頃は卒業前にて影浦内科で実習中でした六人兄弟中五人目で小学校の時より成績が良く、父母兄弟共希望を持ち楽しみにしていたのですが、運がなかつたものとあきらめるより外ありません。

故 土 肥 達 一 (当時学部四年)

大正八年四月八日生

昭和十六年長崎医科大学へ入学

(原稿が遅れましたので紙面の都合上ここに掲載しました)